「譚綴」

『退役疫病神が観察した ある恋の物語』

九谷　六口

（一）

――男と女の出会い。何故、出会ってしまったのか……　理屈では語れませんな。

「たまたま……」

「偶然に……」

「ひょんな事で……」

そして、その内に、

「何故だか判らないの……」

「どう見ても格好良い人とは思えないんだけど……」

「とにかく気になって仕方ないの……」

そして、そのうちに相手を好きだと気付くんですな。

「そう言えば、初めて会った時に何か感じたの……」

「どうすれば、この気持ちを伝えられるの……」

「会っていると手に汗を掻いちゃうの……」

「手が触れただけで、ドキッとしちゃうの……」

そして、男と女としての付き合いが始まり、運が良ければ結ばれる。

人は、それを縁と言いますな。もっとも縁には、良縁と……いや止めましょう。

えっ、判ったようなことを言っているが、お前は誰なんだって？　なるほど、自己紹介をしろと言うことですな。オッホッホー、今までは身分を明かせなかったのですが、すでに退職した身。お話ししたとしても問題は起きないでしょう。

実は、私……疫病神だったんですよ。いやー、真面目に仕事をいたしました。自分でも感心するほどです。お陰で若い頃は、上司の閻魔様から何度も表彰されましたよ。

ところが、ここ最近になって閑になりましてな。平和な社会や幸せな家族に、災いを撒き散らすのが我々の仕事なんですが、出番がなくなっ

Copyright© H.Mitani

てしまいました。人間が自分勝手に災いを起こすんですから……。しかも、我々の持ちネタなど思いも及ばないような阿漕なことを平気でやる……

閻魔様は悩みました。疫病神の仕事が減っていき、余りにも閑な疫病神が溢れだした。これでは経費ばかりが掛かって経営が成り立たない。そこで閻魔様は、地獄界の構造改革を始めたんですな。その一つが定年制の導入ですわ。満三百歳をもって定年とする。大勢が退職しました。しかし、まだ余剰な疫病神が居る。次に打ち出した施策は、希望退職者の募集。これに応募すると特典がありましてな。悪行をやっても良い……。おっと勘違いしないで下さい。地獄界では人を不幸に貶めることを善行と言いまして、その逆の行為、つまり人間を幸せにしてしまう行為、または幸せの邪魔もせずに見ているだけの行為を悪行と言います。

どうした訳か、この私がその悪行をしてみたくなりましてな。そこで、定年まで五十年を残して早期退職に応募した訳です。

退職して、まだ二十年と日の浅い私ですが、ブラブラしていても詰りませんのでテーマを決め、論文でも書いて閻魔様に送ろうかと思いまして、この世をふらついてみたのですが……　いやはや、思いの外、酷い世の中になっていますな。何と亡者だらけ。金の亡者、権力亡者……それに性欲亡者。これでは地獄界にいる亡者たちと変わりがない。特に性欲亡者の氾濫は酷いもの。現役時代には、出会い系サイトなどを紹介する謹厳実直なメールが飛び込んでくると嬉しかったものです。これでまた性欲亡者が増える。実に好ましいと思っていましたが、一旦、悪行に手を染めると着信メールの削除が煩わしくて仕方がない。

エッ、疫病神もメールやインターネットを使うのかって？　勿論です。災いを撒き散らすためには、世の中の動きを把握していなければなりませんからね。もっとも、最近の年若い疫病神は現地調査をせずにインターネットで事を済ませようとしている。どうにも困ったものです。いや、そんな事はどうでも良い。

Copyright© H.Mitani

出会い系サイト……性欲亡者にとり、これほどお手軽に相手を見つけられるものはないですな。なにしろ性欲だけを目的に相手を捜すことが出来るんですから。しかも相手の人間性などを無視した行動が取れる。それだけではない。往々にして互いに傷付け合い、さらには殺し合うこともある。実に素晴らしい。そして、そこには心躍る悲劇が待っていてくれる。

しかし、こんな事をレポートしても面白くも可笑しくもない。そこで私は、自分にとって未知の世界を覗くことにいたしました。テーマも決めました。淡い恋。

お恥ずかしいことに、仕事熱心な私は、恋をしたことがないのです。地獄界にも、それはそれは、素敵な女亡者が大勢居たんですが……

（二）

――台東区駒形。わずかに江戸情緒が残る下町。ちょっと足を伸ばせば上野寛永寺、不忍池、浅草寺、神田明神など心を癒してくれる名跡がある。えっ、寺とか神社ばかり、他にもあるだろうって。ま、そう言いなさるな。男と女の縺（もつ）れ合い……吉原を思い起こす面影を捜すことは、もはや困難。あの頃は良かったですなー。白粉の匂いや嬌声……いや、そんな事はどうでも良い。

駒形に三階建ての木造家屋がありましてな。運が良いのか、はたまた疫病神が手を抜いてしまったのか、震災や戦災にも焼け落ちず、しっかと古びた姿を残しております。玄関を見ると大きめの表札があり、掠（かす）れかけた字で速水荘（はやみそう）と書いてある。

この速水荘、昭和初期に建造された学生相手の下宿でしてな。現在の女将は五代目の速水芳江、五十二歳。どういう訳か速水家には男が生まれない。所謂、女系一族なんですな。従って、速水荘を続けるには婿を

Copyright© H.Mitani

貰う以外にない。ところが婿の来手がない。芳江はチャキチャキの江戸っ子でして、三味線のお師匠さんもやってる。気風も良く実に良い女なのですが、男たちは恐れをなして近寄ってこない。速水荘もお仕舞いかと思っていたところに、ポロッと縁談話。

芳江の夫、孝三は五十六歳。速水家の入り婿ですわ。孝三は、技術畑一筋の男。独身の頃も会社と家を行き来するだけで浮いた話など全くなし。女と付き合ったことがないという朴念仁。両親は困りましてな。何しろ休みの日にも家でゴロゴロしているだけで、鬱陶しくて仕方がない。それに食い扶持も馬鹿にはならない。

縁ですな、そんなある日、人伝(ひとづて)で孝三の両親の耳に芳江のことが耳に入ってきた。父親は喜びましてな。何とこの父親、学生時代に速水荘に下宿してたんですわ。これ幸いと孝三をほったらかしにして話を進めてしまった。話を持ち掛けられた芳江も、まー種馬と思えば良いかと孝三に会わずして受けてしまった。こんな二人の間に生まれましたのが、この物語の主人公、佳奈であります。

孝三ですが、案の定、入り婿である事も影響してか芳江には頭が上がらず、ほとんど芳江の言い成り。逆らった験(ため)しがない。しかも以前と同じように、会社と家の往復のみで外で呑んだりもしない。休みの日にも芳江の横にちょこんと座っているだけ。まるで鮟鱇(あんこう)の雄……しかし、こんな孝三ですが、ひとたび外に出れば某大手電機メーカーの歴とした技術部長であり、大勢の部下を抱えてふんぞり返っている。従って、給料も良い。経済的な面を考えれば、寂(さび)れた下宿など遣る必要はないのでありますが……

「こんな木造の下宿、もう時代遅れよ。別に経済的に困ってる訳じゃないんだから、止めた方が良いわよ。ねぇ、お父さんも何か言ってよ」

大學生になった佳奈は　芳江と孝三に噛みつくんですな。

「良いじゃないか。速水荘は戦災にも耐えたんだ。お母さんの好きにさ

Copyright© H.Mitani

せれば……」
芳江は、何処吹く風で聞く耳を持たない。
「お父さんは、お母さんの言いなりなんだから……」
これが佳奈の口癖ですが、当の両親、何を言われようが全く意に解さない。佳奈は頬を膨らませて部屋を出て行く以外にない。
えっ、下宿は繁盛しているかって？　それがサッパリ。それもその筈、芳江は軟弱な男やパッパラパーな女は大嫌い。不動産屋が話を持って来ても、下宿人の選り好みが激しくて断ってしまう。つまり開店休業の状態……
この物語の主人公、佳奈とは、どんな女なのかお話しいたしましょう。名門、東理大學工学部建築学科二年生。子供の時に見た浅草五重塔に魅せられ、超高層ビルを設計したいと夢に描いている乙女であります。成績も良く、容姿端麗、いわゆる高嶺の花的な存在であります。ところが、本人は男勝りの性格で女っぽい事は大嫌い。男友人はいますし言い寄る男も多かったのですが、恋愛感情など持ったことがない。小学校では下駄箱に手紙、中学では、毎日、同じ同級生からの電話。高校では校門で佳奈を待つ先輩・後輩……　佳奈は別にイヤだとは思わなかったんですな。誘われれば公園やファーストフード・レストラン、喫茶店に。しかし、誰一人として佳奈の心に一矢を射る者はいませんでした。
「なんだか話していても詰まらないし、面倒臭いだけ……」
そんなこんなで、なんと二十歳にもなっても未だにキスすら経験していない。いや、居るんですな、このような女性が。頭脳明晰、容姿端麗……男には情けない所がありましてな、一端、女性に崇拝に似た感情を持ちますと憧れを抱き、近寄り難く思ってしまいます。こうなると、いけません。他の女性には虚勢を張れるくせに、このような女性の前では借りてきた猫のようになってしまう。佳奈はと言うと男などには全く興味など示さず、ひたすら勉学に勤しみ、超高層ビルを夢見ている。
さて、物語に入りましょう。

Copyright© H.Mitani

（三）

そんなある日、佳奈が図書館へと思い、玄関に行くと居間から男の話し声が聞こえてきた。芳江は、三味線のお師匠さんをしているが男のお弟子さんはいない。シャキッとした男であればまだしも、三味線をやろうなんて男の殆どは、なよなよしている。従って芳江の稽古も厳しくなる。扇子でもって手や頭を力を込めて引っ叩く。そうなれば、自然、男の弟子は居なくなってしまう。

「あら、お客様かしら……」

佳奈がドアの隙間から居間を覗いてみると、機嫌の良さそうな芳江の顔が見える。そして禿げ頭の後姿。この頭は、いつもの不動産屋。佳奈は、ガマ蛙のような不動産屋を好きではない。最も嫌いなのは、いつも揉み手をしているところである。

もう一人居る。加奈は下宿を捜している男だと思った。ガッシリした体格で学生服姿。横顔を見ると無精髭。芳江は二人を前に上機嫌で話している。何の気なしにテーブルの上に置いてある学帽に目を移すと徽章が見えた。

「やだー、私と同じ大學……」

佳奈は、まさか、こんな古びた下宿に……とは思ったものの、余りにもダサイ恰好を見ると悲しいかな速水荘にマッチしているようにも思えてしまう。ひょっとしてと胸を過ぎる不安……

夕方、佳奈と芳江と孝三が言い争っている。

「理想的な下宿人だわ」

「お母さん、まさか、あんなダサイ雰囲気の男」

「なに言ってるのよ。隆ちゃんは、今夜、荷物を持ってくるわ」

「タカちゃん……誰、その人？」

「木村隆盛ちゃん。九州出身よ。速水荘の新しい下宿人。そう言えば、

Copyright© H.Mitani

あんたと同じ大學。これも縁ね」
「ちょっと待ってよ。契約しちゃったの？」
「なに言ってるのよ。今夜、荷物を持ってくるって言ったでしょ。私は、一目見てＯＫ、その場で契約したわ。隆ちゃん、早く引っ越して来ないかな」
「東理大學には、学生寮があるのに何でこんな下宿にくるのよ。第一、あの男、むさ苦しい感じじゃない。私は嫌だな。お父さんは、どう思ってるのよ」
「加奈、良いじゃないか、母さんが決めたんだから……」

翌朝、佳奈が台所に行くと孝三の斜向かいに体格の良い男が座り、二人仲良く鯵の干物、玉子焼き、味噌汁でご飯を食べている。その男、ひょいと顔を上げて佳奈を見たが、驚いたように目を見開き、佳奈を見つめた。恐れとも驚愕とも言えぬ妙な顔。鳩が豆鉄砲などと言う常套句があるが、それとも違う顔付き。口を開け、呆けた顔には未知の世界に足を踏み入れた未開人のような表情がある。それだけであればまだしも、なんと思わず箸を落としてしまった。この男、真っ赤になって床に落ちた箸を拾い、慌ててまたご飯を食べ出した。
佳奈は一瞥してテーブルに座ったが、トーストがない。加奈の朝食はパンである。
「お母さん、私のトーストは？」
「加奈、隆ちゃんに失礼でしょう、ご挨拶もせずに……隆ちゃん、これが、あたしの娘、加奈よ」
木村は呆けた顔を一所懸命に元に戻して厳かに言った。
「加奈様、私は東理大學に入学いたしました木村隆盛です。歳は三年浪人した関係上、二十二歳になっております。以後、お見知りおきを」
あっそう、と顔を向けた加奈。むさ苦しい木村よりもトーストが気になっている。

Copyright© H.Mitani

「ねぇ、トーストは？」
芳江が涼しげな顔でキッパリと言う。
「これからはね、朝はご飯にするの。隆ちゃんに訊いたら和食だって言うから」
「じゃー、トーストは、どうするの？」
「なに言ってるのよ。ご飯が嫌なら自分で焼きなさいよ」
佳奈が孝三を睨んで、
「ねぇ、お父さんは、パン食が良いんじゃないの？」
「いや、今まで言えなかったが、私は和食の方が好きなんだ」
孝三はニコニコ笑いながら味噌汁を吸っている。パン食を主張するのは加奈だけ。こうなっては民主主義の原則に則り、加奈の負けである。加奈は頬を膨らませ朝食を取らずに出掛けてしまった。

（四）

此処は、東理大學のキャンパス。都心に在りながら緑多き美しき環境を持つ大學。春の日差しが注ぐキャンパスは、まるで公園のような雰囲気である。芝生に寝転びながら本を読む学生や仲間と車座になり、スナックを食べたりペットボトルを口にする学生。さながらピクニックの雰囲気。とは言え、此処は最高学府であり優秀なる若者が勉学に勤しんでいる……はずなのだが、人生とは様々であり考え方も多種多様。中には勉学以外の目的を持ち入学してきた者もいる。
芝生の上で佳奈と野村博司、松村千津子が話している。野村は佳奈の同級生。大手建設会社社長のボンボン。なかなかのイケメンで典型的な軟派。将来、野村に会社を任せたい父親は、子供の頃から建築学科に進めと言い続けた。面白いもので、本人もそう言うものかと簡単にその気になり、頭の良さも手伝ってスンナリと現役で合格。喜んだ父親は野村

Copyright© H.Mitani

の好き勝手にさせている。小遣いも凄い。父親は並みのサラリーマンの給料に匹敵するほどの額を平気で与えている。従って、野村が金に不自由することは全くない。成績も良く、声を掛ける女性も多いのだが、本人は男っぽい佳奈に憧れている。必須科目だけでなく選択科目も佳奈に合わせている。とにかく、いつも佳奈と一緒に居たがる野村だが、佳奈は、そんな野村を別に鬱陶しいとも思わず好きにさせている。キャンパスにいる時は、いつも二人一緒なのだが、野村には気に喰わないことがある。全く二人の噂が立たないのである。

「参っちゃたわ。ここの学生なのよ、今度の下宿人。無精髭のまんまで朝ご飯食べてんだもん。三浪して入学したんだって。歳は二十二。もう見るからに田舎者で何となく汗臭いの」

「良いじゃないですか。ただの下宿人なんだから」

口を開いたのは松村千津子。

千津子は野村の高校の後輩であり、そんな関係で佳奈とも親しくなっている。この女学生は文学部国文学科一年生。文学に興味を持っているのかと言うと、そうではない。文学部を選んだのは、単に他学部よりも倍率が低かったからでしかない。では、何故、有名大學を受けたのか。勉学は二の次、今のうちに永久就職先を捜そうとの魂胆を持っているのである。有名大學の学生であれば将来は保証されるだろうとの考え。従って卒業できようができまいがそんな事には全く興味がない。

この千津子、行動力には目を見張るものがある。入学したばかりとは言え、工学部や医学部にも顔を出し、可能性のある男子学生を物色しだしている。理想とするお相手はイケメンで金持ち。もともと千津子は東理大學に入学できるほどであり頭は悪くない。恋愛を論理立てて考え、経験も豊富。

「それはそうだけど、家にいる時、顔を合わせる機会が多いじゃない。堪らないわ。それにね、速水荘の下宿代は朝食込みで、家族は下宿人と一緒に食べる風習があるの。毎朝、顔を合わせるのかと思うと、うんざ

Copyright© H.Mitani

りしちゃうわ」
　野村もたまには口を開く。
「出身は、何処なの？」
「九州とか言ってたわ」
「学生寮に住めば良いのに……何でかな？」
「そんな事知らないわよ」
　なんて話していると、遠くから木村が歩いてきた。気付いた佳奈は下を向いた。目聡い千津子が当人とは知らずにゲラゲラ笑い出した。
「やだー、あの学生……　見てよ、時代錯誤も甚だしいわ。学生服に学帽。しかも下駄。ダサ～イッ！　それに、あの風呂敷包み……　何、あれ？」
　野村が呟いた。
「応援団じゃないの」
「違うわよ。ちゃんとした学生服だもん」
　佳奈がボソッと言う。
「あれが、さっき話した下宿人……」
　そんな話をされているとは露知らず、佳奈に気が付いた木村がニコニコ笑いながらやって来た。実直そのものの雰囲気で礼儀正しさも一級品。きちんと自己紹介を始めた。
「佳奈さんにお世話になっている木村隆盛です。国文学科一回生。出来得れば、時代小説作家になりたいと上京した次第であります。以後、宜しく」
　間髪を入れずに佳奈が大声で言う。
「私が世話しているんじゃないでしょ。変な言い方しないでよ」
　木村は、余り気にした様子もなくニコニコ笑いながら立っている。
「私と同じ学科ね。気が付かなかったわ。ねぇ、その風呂敷包み、何？」
　千津子が訊くと、木村は三人の傍に胡坐を掻き自慢げに話しだした。

Copyright© H.Mitani

「教科書や参考書です。日本古来の風呂敷は何でも包めます。これほど便利なものはありません。これが一番です」
そう言いながら、ご丁寧に風呂敷を広げだした。見れば、結構難しそうな本ばかり。そんな中に「五輪書」があった。何度も読んだのであろうか表紙などは手垢で汚れている。
野村が頓狂な声を上げて訊いた。
「木村さんて、オリンピックに興味があるんだ」
木村は目を白黒させ、黙り込んでしまった。野村も、これは違うなと気付いたらしく、
「俺、七輪て聞いたことがあるけど……昔、炭を入れてお湯を沸かしたりしたって。五輪てどんなものなの？」
木村は、怒り半分の顔になりつつある。千津子も野村の顔を見て困った先輩だと呆れ顔。さすがに国文学科に合格するだけのことはある、千津子は五輪書を知っていた。
「新免武蔵守宮本武蔵、己が兵法を二天一流と号し、数多（あまた）なる試合に臨むが、一度たりとも負けたことはなし。五輪書とは、武蔵が書き記したる兵法書」
木村が笑顔満面になり喜ぶこと喜ぶこと。まるで駄々っ子が飴玉を貰ったような顔付きになってしまった。千津子を見つめ、目はウルルン状態。
「武蔵先生は我が師とも言えるお方。剣の道を求め、ひたすら己を研鑽し、ついには、その極意を会得。後世の為にと、この五輪書を遺されました。オリンピックは、まだしも、七輪の仲間とは」
「そんなこと言ったって、今の世の中には関係ないでしょう。チャンバラなんて」
木村の顔付きが変わった。
「チャンバラっ！　剣道をチャンバラと言うんですか」
「だって武蔵って言えば、刀を二本持って、エイヤーって遣る人でしょ

Copyright© H.Mitani

う」
「あのね野村さん、最近、この五輪書は、ビジネス界でも評判なのよ。現代の生き方のにも通ずるものがあるって」
千津子は中々博学な所がある。我が意を得たりと木村が話し出した。
「先生は、兵法、いや人間の在るべき姿を五つの道、つまり、地、水、火、風、空に分けて説かれた。地の巻においては兵法の道のあらまし、そして自分の流儀の考え方を……良いですか、チャンバラとは根本的に違うのです。先生は剣術だけを遣っていては、まことの剣の道を知ることはできない。大きいところから小さいところを知り、浅いところから深いところに至る、まっすぐな道を地固めしなければならない。第二巻、水の巻では、水を手本とし、心を水のようにする」
佳奈が横槍を入れた。
「どうでも良いけど五輪書とか言う兵法書、此処で全部話すつもりなの」
木村は、ひょいっと顔を右上に持っていき、そう言われれば時間が掛かるなとの表情をした。
「私、武蔵って、一生お風呂に入ったことがなかったって聞いたけど、まさか貴方も?」
なんと木村は、それがどうだって言うのと平然とした顔をしている。佳奈が畳み込んで言った。
「ねぇ、速水荘に居る間はお風呂に入ってよね。これから暑くなるって言うのに、私、堪らないわ」
千津子が念を押した。
「本当にお風呂、入ってないの?」
「私は剣道部に入部しました。まだニューカマーの身、偉そうなことは言えませんが……先日、剣道部の稽古を見ましたが、どうも根性が入っていないようです。これではいけません」
木村は急に英語を使ったりする。佳奈が、

Copyright© H.Mitani

「そんな事、訊いてるんじゃないのよ。お風呂ッ！」
「ですから根性を入れて剣道の稽古をすれば、ダクダクと汗を掻く。その汗を手拭いで拭けば風呂代わりに」
佳奈と千津子は顔を見合わせてしまった。佳奈は自分の生涯で、これほど驚いたことはないとでも言いたげな顔付きになった。
「汗を掻けば、それが風呂代わり……」
三人はヨロヨロと立ち上がり、木村を残してその場を立ち去った。
芝生の上に教科書や参考書の店を開いた木村。一人、呆然としていたが気を取り戻したのか、涼しげな顔でそれらを風呂敷に包み出した。最後に五輪書を大事そうに包み、風呂敷を結わえた。

（五）

佳奈は早起きになっていた。理由は至極単純なことである。皆が起きる前に台所に行き、トーストを焼き、たまには目玉焼きを作り、一人で朝食を取るためである。こうすれば味噌汁の匂いや、木村の汗臭さから逃れることができるのである。
大學にも早く行く。学生が少ないキャンパスは、なかなか気持ちの良いもので、しばしもの思いに耽ることが出来る。ベンチに座り、長い髪をたくし上げ、遠くを見つめる佳奈。
――ウォホン、ところで私は、佳奈を容姿端麗な乙女と言いましたな。しかし、これだけではどのように端麗であるか判らない。少々、説明をしておいた方が良いようですな。
身長は、一六十五センチ。瓜実顔で広い額に整った目鼻立ち。髪の毛は肩甲骨に触れるくらいの長さ。パーマなどは掛けずにストレート。風になびく髪の毛は、まるで川っ縁にある柳の木のように艶かしい。目は

Copyright© H.Mitani

大きく二重瞼でして、眉毛は細く尻上がり。この尻上がりが、キリッとした面立ちを作っております。鼻筋は細く、日本人にとすては、ちょっと高め。唇は、やや大きめで肉厚。唇が濡れている時なんぞは、この私でさえ堪られない思いに駆られてしまいます。情熱的な唇なんですが、何とまだ、唇を重ねた男は居ないとのこと。いやはや勿体ない話です。

えっ、身体つきですか。それはもう貴方、言うまでもないでしょう。すらっと伸びた足。足首は細く、上に行くに従ってほど良く太くなっている。足の付け根はピッタリとくっ付き、風などは通らない。え、見たことがあるのかって？　そりゃ見ましたよ。大學のプールで泳いでいるところを……学生の水着は紺色と決まっておるようで、しかも余計なものが付いていない。若々しく美しいピチピチとした体の線を惜しげもなく見せてくれる。なになに、肝心な所について話せですか。良いでしょう。胸は、そうですな……　CかDというところでしょうか。小さいのもナンですがデカ過ぎるのも考えもの。ヒップですか？　くびれたウエストから急激に盛り上がり、歩くたびに微かに動くんですな。それはもう若鹿を思わせる清々しさ。いやはや理想的なバディーですな。これから花開こうとする大輪の薔薇。擦れ違う男が振り返るもの無理はないと言うもの。

だがしかし、本人はそんなことには無頓着。ひたすら超高層ビルを夢見ている。だからこそ余計、魅力的なんですな。

＊

佳奈は、毎日、講義やデッサン、製図の授業に真面目に出席し、真剣にノートを取っている。そして、どの授業、実技にも佳奈に憧れを抱く野村がいる。お金持ちの野村は、通学に外車を使っている。佳奈に送り迎えをすると提案するのだが、佳奈は断る。理由は判らないが、どうやら佳奈は野村との付き合いをキャンパス内だけに限っているようにも思える。

Copyright© H.Mitani

木村だが、これまた真面目に講義を受け、当然ながら無遅刻無欠席。気候も良くなり、暑さも感じる毎日だが、相変わらず学生服に学帽、それに下駄履き姿である。汗を掻けば風呂代わりになるとの信念は、未だに捨ててはいないらしく微かに匂う汗臭さを物ともせずに勉学に勤しんでいる。講義がない時は図書館へ。江戸切り絵図などを熱心に見て、ニヤニヤしたり和綴じの本を捜しては、貴重品を扱うようにページを捲っている。授業が終われば一目散に剣道部へ。風呂代わりに汗を流す毎日を送っている。

剣道部。二百四十畳ほどの広い道場を持ち、部員数は百名に近く、体育会系としては柔道部と共に伝統を誇っている。今年の新入部員は、二十五名。まったくの初心者も五名ほど含まれている。日々の稽古は、初心者、初級、中級、上級に分かれて行なわれるが、板の間の雑巾掛けは新入部員の仕事と決まっている。つまり、学年や年齢に関わりなく、さらに有段者であっても新入部員であれば扱いは同じなのである。雑巾掛けは、神聖なる道場を綺麗に保つとの目的もあるが、足腰の鍛錬にも役立つものである。新入部員は剣道着に着替えた後、横一列に並び、号令と共に体を屈めて一斉に拭き始める。ところが、これは競争と同じである。往復約四十メートル。別に早く拭き終わったからといって、何らの特典もないのだが、一列スタートとなればビリにはなりたくないもの。皆、懸命になってしまう。途中でもんどり打って頭から転がる者や長々と俯（うつぶ）せにへたり込んでしまう者も多く、頑張って往復できたとしても拭き終わった途端に足を投げ出してゼイゼイしてしまう。

そんな中、他の部員を引き離し、常に断トツで終了するのは木村である。しかも、平気な顔で立ち上がり、息も上がっていない。見る者が見れば、その修練度合いが判ろうというもの。

伝統ある剣道部の稽古は、長い歴史に培われたものである。準備体操から始まり基本練習、打込み練習の後、礼儀正しく始めの挨拶をして防具を付ける。基本打ち、技の稽古、打ち込み、懸かり、地稽古にて終了

Copyright© H.Mitani

する。稽古終了後は、始めの挨拶と同様、全員が正座して面をはずし礼儀正しく終わりの挨拶をする。このように書いてしまえば、あ、そうですかで終わってしまうが、その運動量は大変なもの。しかも、地稽古ともなれば闘志剥き出しで対峙することになる。

――　何やら……人間には爬虫類脳とか言う脳があるそうで、闘争心を司（つかさど）ってるらしいですな。確かにコモド・ドラゴンなどを見ると凄まじい闘争心の塊のように見えますが、あれが人間の脳にも存在するそうです。この爬虫類脳を制御するのが人間脳、つまり理性溢れる脳味噌。この二つが攻めぎあっているのが人間なんですな。現代においては、人間脳の方が勝っているため大規模な戦争などは起こっていない。しかし、爬虫類脳を抑制しすぎるとストレスとして充満してしまい、これも良くない。そこで、人間はストレス解消法、つまり爬虫類脳を満足させる方法を発明したんですな。それがスポーツであり、絵画、音楽などの芸術……大したものですな人間とは……。その爬虫類脳を満足させようと……いや、本人が意識しているかどうかは兎も角、ストレス発散とばかりに竹刀を握りしめて稽古を遣る。しかし、夢中になればなるほど体力や気力ではなく技がものを言ってくるんですな。体がデカければ良いと言うものではない。

木村ですが、身長は百八十三センチ。上背はある方ですがこれ位の男は珍しくもない。体重は九十キロで、まあ、均整が取れていると言えますな。入部当初は初級者のグループにいましたが、今は上級者と稽古をしております。木村の稽古は凄まじいもの。背筋を伸ばし、足捌き、摺り足は床を滑るが如き静かさで、まるでアイス・スケートのような優雅さ。ところが掛け声が凄い。普段、話している時の声音（こわね）に対し、二、三オクターブも高い声を出す。いわゆる頭の天辺から出す声。聞く方は堪ったものでありません。かと思えば腹に響き渡るようなドスの利いた野太い掛け声。稽古に参加する部員は五十名ほどですが、木村は目立って

Copyright© H.Mitani

しょうがない。自然、注目されてしまいます。そうそう、打突（だとつ）ですが、これがまた物凄い。面、小手、胴と小気味良い音を上げる。音といえば素振り、早素振りなどは、ビュッ！　ビュッ！　と傍に居る者が恐ろしくなるほど。剣道部では、早くも一目置かれる存在になっているが、それもその筈、木村は、全日本剣道連盟より四段の証書を受けているんですな。

生まれは鹿児島で、子供の頃より道場に通い詰め、熱心さの余り三浪する破目に陥っております。大抵の場合、流派を渡り歩くことはないのでありますが、この木村は違っていました。流派は、流派。己は己。研鑽するは我にあり。道を開くも我にありなどと嘯（うそぶ）き、諸道場の門を叩いたんですな。いわば武者修行のようなもの。まずは、示現流道場にて薩摩藩伝来の荒々しい剣道を身に付け、次いで真心影之流剣術、天真流剣術、外山流剣術へと渡り歩いた。各道場の師範は師範代として留めおきたいのだが、新たなる道を求めたく、などと、至極、真面目な顔で断る始末。さらに剣道大会への参加を促しても、我は修行の身などと、およそ現代にそぐわない事を言って受け付けない。

喜んだのは剣道部顧問の教授。良き師範代が入ってきたものだと、口には出さぬがほくそえんでいる。

私事で恐縮ですが、この男が何が何でも全国大会で優勝したいとか、欲を出してくれれば、真っ先に奈落の底へ落としたくなるというものなのですが、私が現役であったとしても手を出せないほど無欲で朴念仁。こういう人間を疫病神泣かせと言いましてな、仮に閻魔様が存在を知ったとしても対象として無視する以外にないのであります。ま、せめて、三度の入試不合格くらいが関の山でして。居るんですな、このような人間が……

おっと、松本千津子についても書いておいた方が良いようですな。えっ、今、彼女は何をしているかって？　文学部の授業などはそっちのけ。医学部や工学部の講義にもぐり込んで男を物色しております。いや

Copyright© H.Mitani

はや恐れ入ります。千津子ですが、これまたなかなかの美形でしてな。丸顔に中肉中背。中背と言っても、身長は百六十センチほど。切れ長の目、細めの鼻筋におちょぼ口と、見た目には大人しいお嬢様といった雰囲気であります。ショートヘアーで眼鏡を掛けている。実は裸眼でも日常生活には影響がないのですが、丸顔に変化をとの魂胆でしてな。ま、伊達眼鏡のようなもの。好奇心が強く何事にも首を突っ込む。特に興味を抱いている分野は恋愛。幼稚園から高校まで振った男は数知れず。眼鏡を掛けていない時の千津子は、おっとりとした頼りなさげな感じに見えますので、男どもはそんな女につい声を掛けたくなってしまうんですな。ところが声を掛けられたからといって誰でも良いはずもない。まずはイケメンでなければならない。上背は最低でも百七十五センチ。とにかく野暮ったさが、ほんのちょっとでも漂う男は駄目。さらに清潔感も重要な要素であります。これらが千津子のフィーリングに合致すれば一次試験合格なのですが、これで安心してはいけない。ひとたび二人きりになると、千津子の具体的好奇心がムラムと湧き起こり、矢継ぎ早な尋問が始まってしまいます。

「ねぇ、家族構成を教えて……」、「将来、何になりたいの……」、「私の何処が好き……」、「女が喜ぶ事って、何だと思う……」、「ちょっと手を握ってみて……」、「あんた、経験はあるの……」、「私、お腹空いたけど、どんな食事、奢ってくれるの……」、「今、お小遣い幾ら……」

まだまだ続きます。こうなると、男とは、まるで女郎蜘蛛の網に掛かったようなもの。しかし、これぐらいの尋問にスラスラと答えられないようであれば、二次選考失格であります。つまり頭の回転が悪いとの評価を下されてしまうんですな。仮に二次選考に合格したとしても、次には厳正なる最終審査が待っている。これが実に厳しい。審査内容は、どのようなものか。実地検証ですな。網に掛かった者には、結構、際どい尋問がありましたので既にその気になっている。舌を出してゼイゼイと、まるで盛りの付いた犬のような素振りを、ほんのちょっとでも見せ

Copyright© H.Mitani

れば、即その場にて退場命令が出されてしまう。あくまでも千津子の思惑が優先するのですな。千津子理論によれば、要するに男とは四六時中求めるものである。だが女は違う。男とは、女がその気になった状態を鋭いセンサーで感じて応じなければならない。つまり、男とは繊細なる感性、感受性を持っていなければ駄目。これが相性であり、絶対不可欠な条件なのである。今、付き合っている男はいない。だが、千津子はそんな事を気にする女ではありません。膨大なる調査資料を元に、新たなる環境である医学部及び工学部に蜘蛛の巣を張り始めたところなのであります。何故この二つを選んだのか。答えは簡単でありまして、卒業後の就職率が良いこと、及び、生活に安定性があると考えているためなんですな。一方、文学部はどうかと言うと全く興味を抱いていない。どうせ、卒業しても一般企業の事務系か出版社での原稿取り。所詮、安月給取りで生涯を終わるのが関の山。つまり、連中は二束三文の価値しかないと考えているんですな。ましてや、小説家志望の木村などには洟も引っ掛けようとしない。書けるかどうかの保証もなければ将来性もない。百歩譲って、仮に多少の文才があったとしよう。目指すのは時代小説だという。この考え方自身が、すでに間違っている。売れる訳がないではないか。最近の文学賞を見れば判りそうなものを。新人賞をとるのはラブ・ストーリーかサスペンスではないか。時代物で受賞した者など、ここ数年いない。千津子は、この事実を木村に伝えようとしたんですが止めたんですな。

「どう見たって、あの人にラブ・ストーリーは無理……」

（六）

佳奈は、ちょっと寝坊してしまった。授業には充分間に合うが、問題は朝食である。いそいで台所に行ったが、案の定、家族と木村が食べて

Copyright© H.Mitani

いる。朝食抜きでと思ったが腹ペコである。皆には目で朝の挨拶をしてトースターの前に立った。

芳江が機嫌よく芸事について木村に話している。

「隆ちゃんは偉いわ。江戸情緒を知りたくて速水荘に下宿したなんて。私は、三味線のお師匠さん。江戸情緒といえば、チントンシャンよね。それに、芸者さんやいろいろなお姐さん方と顔見知り。小粋な姐さんたちは、ちょっと年取っちゃったけど、芸事と口はまだまだ達者よ。今度、紹介してあげる」

芳江は、はしゃいで喋っている。しかも朝っぱらから。佳奈は、芳江を横目で睨んでいる。孝三を見れば、聞いているのかいないのか黙々と飯を喰っている。

変だな。佳奈は、そこはかとない匂いを嗅いだ。テーブルを見ても、くさやの干物などはない。だが、それに近しい匂い。改めて芳江と孝三を見たが別に気にしている様子もない。まさか汗の匂い……　その時、木村が声を掛けた。

「佳奈さん、同じ大學なんだから一緒に行きませんか？」

聞いた途端、佳奈の形相が変わった。怒りにも似た声音で、

「私と貴方とは何の関係もないんだから、親しそうに話し掛けないでよ。それに、たまにはお風呂に入ったら。臭いわよ！」

芳江が顔を顰めて言った。

「あんた、汗臭さしか感じないのかい。情けないねぇ。この惚れ惚れするような男の匂い」

情けない？　芳江の言葉に佳奈は呆れ果て、食べずに出掛ける事にした。通学途中で何かをと思ったが、それでは授業に遅れてしまう。

空腹感は人間を感情的にさせる。

「佳奈さん、さっきからグーグー言ってますよ」

「煩いわね！　黙って講義を聴きなさいよ」

Copyright© H.Mitani

「でも……周りの人もチラチラ見てますよ。これでは佳奈さんのイメージを壊します」
優しすぎるのか、恋は人を盲目にしてしまうのか、野村は体を横滑りさせて床に体を押し付けるようにして教室を出て行った。

――世の中とは難しいものでしてな。相手に対する優しい思いやり、良かれと思い取った厚意が、思わぬ方向に事態を進めてしまうことがあるんですわ。野村にとって佳奈の存在は美であり優雅な汚れなきもの。講義中に腹の虫がグーグー鳴きだし、周りの者が笑いを堪えた顔でチラチラ見るなどという事態は許し難いこと。教室を出た野村は、一目散で生協に走りましてな。ウーロン茶のペット・ボトル。ま、ここまでは良かったんですが、さて、腹の足しになるものは……なにしろ、野村は焦っていましてな。人間とは不思議なものでこのような事態に陥ると自分の好みが出てしまう。手に取ったのは、小丸煎餅。

＊

煎餅は米の粉を使っている。腹に入れば膨らむ。よし、これであれば問題ない。教室に戻った野村、
「佳奈さん、これ」
腹が鳴っていようが、周りから失笑のコソコソ話しが聞こえてこようが、佳奈は講義に集中している。野村の声に、ふと横をみると座席の上にペット・ボトルとスナックの袋が置いてある。空腹感は人間の理性にブレーキを掛けてしまう。佳奈は、袋を持ち口を開けようと両手で思いっきり引っ張った。ベリッ！　広い教室ではあるが異質な音が響き渡ってしまった。この段階で教室は水を打ったようにシーンとした。誰もが耳を澄ます。そんな雰囲気に気付かないのは空腹感に負けた人間。佳奈は袋に手を突っ込み、小丸煎餅を三枚つまみ出して一気に口に放り込んでしまった。こうなれば後は咀嚼（そしゃく）するのみ。真っ白な美しい佳奈の歯が、

Copyright© H.Mitani

小気味良い音を立てて煎餅を砕き出した。

「こともあろうに煎餅とは……君たちねぇ、私は、この大學で四十年も教鞭をとっているが……そりゃ、講義中に弁当を喰う学生も居るよ。だがね、そいつらは隠れてコソコソと音を立てずに喰ったもんだよ。漂ってくる匂いは気になったが、ま、若者は腹が減るもんだ。私だって若い頃、同じ事をやった。私は心の広い人間だと自負している。そんな些細なことを、いちいち取り立てて文句を言ったりはしない」

――ここは、構造力学の権威、若宮名誉教授の部屋であります。御歳七十五歳。請われて定年後も大學に残り、特別講義を持っているんですな。謂わば建築界の重鎮であり、超高層ビルの耐震構造に関しては世界的にも著名なお方。テカテカに光り輝く禿頭は、このお方の矍鑠（かくしゃく）とした毎日を現しております。

＊

「いいかい、こう言うことは他人に迷惑を掛けないように遣るもんなんだよ。それが、何だ、煎餅とは！　買って来たのは野村君か。君は常識がないのかね。スナックといえば、ボール・ケーキがあるじゃないか。あれなら音を立てずに食べることが出来る。頭を使いなさい、頭を。ところで、お父さんは元気かね？　彼も滅茶苦茶な学生だった。当時、私も若かったからね、よく一緒に酒を呑んだものだよ。いや、そんな事は、どうでも良い。私が言いたいのは、お父さんは裂きイカとか都コンブを食べていたということだ。しかし、匂いには困ったが」

「父も授業中に……」

「常習犯だった。しかし、懐かしい思い出だ。お父さんに宜しくな」

「はい。今後、気をつけますので」

佳奈と野村が、ホッとして教授室を出ようとすると、

Copyright© H.Mitani

「待ちたまえ。速水君にもの申したい。座りなさい」
二人が頭を垂れて、再び椅子に座る。
「まず、訊きたい。煎餅を買って来いと命令したのは、君か？」
「いえ、野村君が勝手に……でも嬉しかった。先生！　私は男の人に命令などしません！」
「そうか、判った。やはり主犯格は野村君か。速水君、これからは音と匂いがしないものにしなさい。いいね」
「判りました。どうも済みませんでした」
二人が腰を上げると、また、教授が手で制した。
「まだ、話しは終わっとらん。速水君、君だった思うが、昨年の試験……　えーと、柔構造と剛構造の違いを端的に述べよ、だったな。君の解答には面喰った。判っているのか、判っていないのか、判らなかった。今でも覚えている。
“柔構造は　柳の腰よ　何が起ころが　受け流す”
君、ありゃ都々逸だろう。いいかい、私は、この大學で四十年……いや、これは、さっき話したな。厳粛なる我が大學の試験を都々逸で答えたのは君だけだ。ちょうど良い。どういう了見で書いたのか、話を訊こう」
佳奈が、渋々語り始める。
「子供の頃、父に連れられて浅草五重塔を見たんですけど、その時、父が五重塔は地震が来ても大風が吹いても、柳の木みたいにゆらゆら揺れて壊れないんだよって。私、ビックリしたんです。それに凄いなーって思ったんです。その記憶が……先生、あれが都々逸だなんて、私、知りませんでした。ただ、語呂が良かったので」
「うーん、そうか。実は、私の趣味は都々逸なんだが……都々逸を遣る学生が居るのなら同好会でもと、心躍らせていたのだが、違ったのか」
僅かに肩を落とした名誉教授だったが、気を取り直して話し出した。
「どうかね、同好会を作る気はないかね」

Copyright© H.Mitani

佳奈、キッパリと、
「ありません！」
名誉教授、今度は、ガックリと肩を落としてしまった。野村が恐る恐る口を開いた。
「文学部の学生なら……声を掛けてみればいいのに」
名誉教授、キッと顔を上げて、
「野村君！　私は趣味と言っただろう。学生とは言え文学部であれば専門知識を持っている。そんな連中とは遣りたくない！」
「何故ですか？」
佳奈が訊いた。
「負けるに決まってるじゃないか。それに都々逸同好会を作れば、顧問は文学部の教授がなる。私の都々逸に、あれやこれやとイチャもんを付けるに決まっている。俺は、とやかく言われるのは嫌いだ！」
世界的権威が俺などと言い出した。心なしか、二人には教授のテカテカ頭に赤みが差し出したように思えた。これ以上、付き合うのは危険である。
「先生、次の講義が始まります。お話は、いずれまた」
二人は急いで立ち上がり、逃げるように教授室を飛び出した。
「佳奈さん、朝ご飯は食べた方が良いですよ」
「判ってるわよ。匂うのよ！」
「宮本武蔵ですか」
「そう」
野村、心なしか勝ち誇った顔になった。これで、少なくとも一人は脱落した。

（七）

ある夜、芳江と孝三がテレビを見ていると、泥だらけの木村が帰って

Copyright© H.Mitani

来た。見れば学生服ではなく灰色っぽい作業服を着ている。二人は顔を見合わせて首を傾げた。
「芳江、一応、事情を訊いた方が良くないか」
「判ってるわよ。ねぇ、隆ちゃん、どうしたの？」
居間の方から声を掛けられた木村。どうしようか考えているようだったが、居間に顔を出した。
「ちょっと、アルバイトに精を出しすぎちゃいまして」
芳江と孝三が、また顔を見合わせる。
「アルバイト、あら、何のアルバイト？　ねぇ、こっちに来なさいよ」
流石に、こっちに来て座りなさいとは言わない。ソファーが泥だらけになってしまう。木村が、のっそりと居間に入ってきた。
「教えてよ、何のアルバイト？」
話によれば、木村は良い金になると土木工事のアルバイトをしていると言う。九州の両親は仕送りをすると言い張ったが、成人男性たるもの自分の費えは自分でと断ったらしい。それを聞いた芳江、
「エライッ！　隆ちゃんは偉い。ねぇ、隆ちゃんは、長男だっけ？」
急に話が変わった。
「いえ、次男坊ですが」
「鹿児島で結構大規模に農業とか酪農を遣ってるって聞いたけど、実家は？」
「兄貴が継ぎました」
芳江が何やら嬉しそうな顔をして、意味ありげに孝三に目配せをした。孝三は複雑な顔で木村を見ている。
「その作業服、洗濯しておこうか」
「いえ、明日、現場に持って行けば洗濯済みの服と交換できます」
「あ、そう。ねぇ、いくら風呂が嫌いだからって今日は、入りなさいよ」
「は、はい。判りました」

Copyright© H.Mitani

木村は居間を出ていったが、芳江は、まだニンマリとした表情を変えないでいる。
「芳江、余計な事を仕掛けるんじゃないよ」
「別に。ただ悪くないなと思ってね。貴方だって、そう思うでしょう」
「別に。成るようにしか成らないのが人生。ケ・セラ・セラ」
「何だか気に喰わないみたいね」
「そうじゃない、押し付けちゃいけないってことだよ。こっちだけじゃない、向こうさんにも事情があるかも知れないじゃないか」
「こっちの事情って何よ？　あー、入り婿ってことね。別に良いじゃない。アッ、貴方、入り婿、嫌だったんだ。さっきから隆ちゃんを同情の目で見てたけど……」
「そんな目で見たりしていない。勝手に決め付けるんじゃない。そう言うところがいけないんだよ、芳江は」
「まー、あたしが何日、決め付けたりしましたか。言ってもらおうかしら！」
佳奈が帰ってきた。居間から芳江の声が聞こえる。佳奈はドアの前に立ちって聞き耳を立てた。
「ねぇ、はっきり言ってよ！」
「もう良いじゃないか。夜も遅いし……」
「はぐらかさないで。ねぇ、どう言うことよ！　そういうウジウジしたところって、男らしくないわ！」
「ウジウジだと！　こっちが入り婿だと思って……言い過ぎだ！」
佳奈は、あーまたかと言う表情で階段を上がって行った。

（八）

――速水荘に、派手目な服を着たグラマーが訪ねてきましてな。エ

Copyright© H.Mitani

ッ！　グラマーとは時代掛かった言葉ですと。ま、そう言いなさんな。私、結構、年寄りですからな。

＊

芳江が、このグラマーを居間に通すと、

「真奈美と申します。あのー、木村さんがこちらにご厄介になっているとお聞きしましたので……恐れ入りますが、これを木村さんに渡していただきたいのですが……」

と、洒落たスーツを芳江に渡した。不審に思った芳江、

「立ち入った事を訊くようですが、どのようなご関係なんでしょうか？いえね、下宿人とは言え、大家は親代わりのようなものでから」

と訊いた。真奈美、すまし顔で、

「オホホ、どのような関係かと聞かれましても。まだ、大した関係ではございませんのよ。大家さんが気になさるほどの仲ではありませんわ」

言った途端、顔を赤らめて思わせ振りな顔付きをした。

真奈美は、女の芳江が見ても目の遣り場に困るほどのナイス・バディー。何もここまでデカクなくても良いだろうと思うほどの巨乳。オッホッホーと笑う度に、ユッサユッサと揺れる胸。芳江とて以前は速水荘の美人女将と駒形辺りでは名の知れた女である。まだまだ、女っ気タップリ。たかが巨乳ごときになどと変な見栄を感じてしまうが、いくら訊いても胸を揺さぶって、オホオホ、オホホの繰り返しで埒が明かない。そうこうしているうちに、では、とこれまた大き目の尻を揺さぶりながら帰ってしまった。

お笑い番組を見ていてもイライラが募る芳江。傍の孝三、触らぬ神に祟りなしと小さくなっている。芳江は木村を問い詰めようと手薬煉（てぐすね）ひいて待っている。だのに、このような日に限って木村の帰りが遅い。

さらに芳江のイライラを助長させる事態が起こってしまった。十一時を過ぎたが、佳奈がまだ帰ってこないのだ。

Copyright© H.Mitani

芳江と孝三は佳奈を自由にさせている。ある意味では娘を信用している訳だが、せめて一つだけと門限だけは守らせている。佳奈もそこいら辺は心得ている。門限さえ守れば、後は自由ときちんと十一時には帰ることにしている。

「佳奈は遅いな。どうしたんだ？」

「そんなこと、私に判る訳ないじゃない」

「母親だろうに……」

「あら、強気な発言ね。じゃー、父親には責任がないって言うの！」

「いや、そこまでは言っていない。ただ遅いなと言っただけだよ」

「佳奈も佳奈なら隆ちゃんも隆ちゃんよ。こんなの貰ったりして」

「さっきから訊こうかどうしようか考えていたんだが、このスーツ、俺には派手すぎるしサイズがデカイ。木村君のだったのか」

「貴方、私に訊きたいことがあるんだったら訊いたら良いじゃない。夫婦でしょう、あたしたち」

「それは、そうだが。ま、それは兎も角、プレゼントか？」

芳江が真奈美の事を話した。

「ほうー、木村君、結構、ご発展だな。羨ましい限り」

「何言ってるのよいい歳して。ねぇ、あの二人、どんな関係だと思う」

「私は、その真奈美という女に会っていない。従って、二人の関係など想像も付かない。しかし、男と女であることには変わりがない。推して知るべし」

「なに気取ってるのよ。心配だわ、あたし……」

「何言ってるんだ。佳奈の方が気掛かりだ。帰ってきたら取っちめてやる！」

「いいじゃない、門限破りは初めてなんだから。友達と飲み歩いているのよ。佳奈のことより隆ちゃんよ。どうなってるんだろう」

「下宿人のことなどは、どうでも良い。佳奈だ！」

「佳奈は、大丈夫！　問題は、隆ちゃんよ！」

Copyright© H.Mitani

芳江と孝三が犬も喰わない言い争いをしている、その頃……

「野村のやつ。それに時計が止まっちゃうんだもん。でも信じてもらえないな」

佳奈、家の近くでウロウロしている。顔が赤い。どうやら呑んでいたらしい。

この日、野村は車を車検に出したため徒歩で大學に来た。佳奈に会うと、一度くらい良いでしょうと根性込めて酒に誘った。佳奈も別に野村が嫌いな訳ではない。ま、良いかとＯＫしたが条件を付けた。千津子を誘うこと。それに門限が十一時なのできちんと時間を守ること。佳奈と野村が千津子に言うと、私は未成年だから飲めないと杓子定規なことを言う。野村が必至になって、じゃーどうすれば一緒に行ってくれるかと訊くと、食事なら付き合うという。結局、イタリアン・レストランに行くことになった。

佳奈と野村はワインを飲んだが、千津子はひたすら喰っている。話題は木村である。

「現代における貴重品」

「この世のお荷物」

「二十一世紀の遺物」

「五年間、履きっぱなしの臭いたっぷりのスニーカー」

「棒振りチャンバラー」

「風呂敷大尽」

「匂いおこせよラフレシア」

話は尽きない。佳奈は時計を見たが、まだ九時。後、一時間は大丈夫。真っ赤な顔になった野村が、呂律の廻らない口で、

「佳奈さ～ん、私は、きちんとした男で～す。そろそろお時間で～す」

と、佳奈の顔の前に腕時計を持っていった。佳奈が見ると十一時。

「何よ！　十一時！　門限じゃない。どうしてくれるのよ！」

Copyright© H.Mitani

「あれ～、十一時に終われば良かったんじゃないの～」
「なに言ってるのよッ！」
エッ？　と頓狂な顔をしている野村と千津子を店に残し、佳奈は急いで表に出た。
ウロウロしてたって物事は解決しないし、時間が戻ることもない。しかし、初めて門限を破った佳奈の頭の中は、アルコールも手伝い混乱していた。
「どうしよう……今まで怒られたことないけど、お父さんも怒るかな。でも、冬じゃなくて良かった。凍えちゃうところだったわ。裏口から入っても見つかっちゃうし、正々堂々……やっぱり怖いわ。どうしよう」
何処からともなく足音が。目を遣ると、泥だらけの木村が足取り軽やかに歩いてくる。木村が佳奈に気付き、ニコニコ笑って手を振った。
「よし、良いことを思い付いた」
木村は佳奈の笑顔を見てちょっと面喰ったが、まさか狐でもあるまいにと、こちらも負けじと笑顔で近付いた。

――人間には二種類あるんですな。アルコールが入ると五感が鈍くなるタイプと、逆に研ぎ澄まされるタイプ。運悪く、佳奈は後者だったんですな。普段は汗臭いだけの木村でしたが、この夜は機械油の臭いとドブ泥の臭いが混じり合った何とも言い様のない臭いを漂わせている。佳奈は、一瞬たじろいだんですが、此処で逃げ出しては家に入れない。他の方便は、全く思い付かなかったのであります。

＊

「こんばんは。お元気ですか？」
自分でも妙な事をと思ったが、何しろ木村とは、まともに話しをしたことがない。話の切り穂が見つからないのである。
「勿論、元気です。佳奈さんは？」

Copyright© H.Mitani

「そりゃー、見ての通り、私だって元気よ」
「今、まさに子の刻、月明かりに佇（たたず）むうら若き乙女。頬を朱に染め、潤んだ眼を我に向ける。あー、何事か起こらんや」
佳奈は呆気に取られている。
「お見受けしたところ、何故かこの場にてご思案なさっているご様子。夜も更け、暫しの時が過ぎれば日付も変わろうとしております。まさか、我の帰りをお待ちになっていたのでは、などと妄想に駆られる、今日、この頃……」
佳奈は付いていけない。鼻をピク付かせると仄かにアルコールの香り。自分も酔っているが、それを上回る香り。
「ねぇ、酔ってるの？」
木村は急に肩を落とした。
「佳奈さん、飯場で呑み過ぎまして。しかも泥だらけ。女将さんに風呂に入れと言われるのかと思うと」
「あら、木村さんも辛い立場なんだ。ねぇ、協同戦線を張らない」
「エッ！」
「家に入ったら私が囮になる。お風呂の話しが出ないようにしてあげるから。その代り協力してよ」
「協力？」
「お願いだから、私と呑んでいた事にしてくれない」
「……」
「実は、私、十一時が門限なの。もう、十二時を過ぎたでしょう。私には理解できないけど、母は木村さんを気に入っているわ。一緒だったって言ってくれれば怒られないと思うの。ねぇ、良いでしょう」
木村の顔付きが変わった。
「佳奈さん、いくら佳奈さんの頼みとは言え、私は嘘をつけません。駄目です！」
「じゃー、お風呂に入る覚悟はあるんだ」

Copyright© H.Mitani

「……」
「ねえ、総て丸く収まるんだから、お願い！」
「駄目です。嘘は付けません」
「じゃー、どうすれば嘘ついてくれるの」
　木村が腕を組んで考えている。時間は経っていくばかり。佳奈は気が気ではない。意を決した素振りで木村が口を開いた。
「判りました。義を見てせざるは勇無きなり。では、生まれて始めて嘘をつきたいと思います。ついては、七月十日に浅草寺の四万六千日があります。ほうずき市……」
「ほうずき市？　それが、どうしたの」
「私と一緒に行ってもらいます」
「ちょっと待ってよ。そんな所に行ってどうするのよ」
「江戸情緒、そうだ浴衣姿でお願いします」
「浴衣？　駄目！　私、着たことがない。他の条件にして」
「たかが風呂。覚悟を決めれば、それで済みます。では」
　木村が玄関の方に歩き出した。確かに覚悟を決めれば、風呂など大したことではないかも知れぬ。佳奈は、急に己の立場の弱さを知った。佳奈は思った。彼は、所詮、下宿人。時が経てば出て行く人間。
「わ、判ったわよ！　行けば良いんでしょう。行くわよ！」

「隆ちゃん、臭いわ。お風呂に入りなさいね」
　木村は、黙っている。
「佳奈、二人揃ってどうしたの？」
「十時頃、木村さんと会っちゃって……たまには、って一緒に呑んでいたの」
　芳江は聞いているようで、聞いていない。
「あ、そう。ところで隆ちゃん、あんたにね、訊きたいことがあるんだけど」

Copyright© H.Mitani

佳奈は、これで追求は終わったのかと拍子抜けしてしまった。木村は矛先が自分に廻ってきた事に戸惑っている。
「……判りました。風呂に入ります」
「そんな事、どうでも良いのよ！　ねぇ、真奈美って人、何なの？」
木村は、それは誰？　とでも言いたげな様子でキョトンとしている。
「あのホルスタインのような女、あんたと、どんな関係なの？」
ホルスタインと聞き、木村は思い出した。
「あのー、その人はスナックのママですが、何で急に真奈美さんの話になるんですか？」
佳奈は、自分は無罪放免と涼しい顔になっている。真奈美とか言う女などどうでも良い。
芳江が昼の出来事を話した。孝三は、とにかく佳奈が無事に帰ってくればそれで良い、との様子で既にコックリ、コックリと舟を漕ぎ出している。
「これが、そのスーツよ。全くセンスがないわこのスーツ。あんた、こんなものを貰うような関係なの？　ねぇ、勘違いしないでよ。私たちにとっては、どうでも良いことなのよ。でもね、九州から出てきて変な女に捉まったなんて事になれば、国のご両親にも済まないと思うの。これが人情じゃない」
木村は、スーツを持って眺めている。
「どうしたんでしょう、二、三度、飲みに行っただけですが」
「それだけなの？」
「はい。でも、いろいろと親切にして貰いました」
「親切？　どういうこと？」
「他にもお客さんが大勢いるのに、私の席でいろいろと話しをしてくれました。困ったのは、代金はいらないって言われることです。それに……」
芳江だけでなく、孝三も目をパッチリ開けて聞き耳を立てている。佳

Copyright© H.Mitani

奈も興味をそそわれたらしく、ニヤニヤして聞いている。
「それに、って何よ！」
芳江だけがイライラと尋問を繰り返している。
「いえ、いいです」
芳江は尋問を続けたが、木村は頑として答えない。さすがの芳江も諦めざるを得ない。
「で、このスーツ、どうするの？」
「返します。貰う謂れもありませんので……」
「あ、そう。じゃー、私も一緒に返しに行くわ」
孝三が口を開いた。
「何故、一緒に行くんだ」
「だって下宿人だし……」
「そう言うのを余計なお節介って言うんだ。見っとも無い。何で下宿屋の主人が行く必要があるんだ。好い加減にしなさい」

――真奈美について、お話しておいた方が良いようですな。
速水荘の近くに「マナミ」というスナックがありましてな。真奈美は其処のママであります。実業家の夫と暮しておりましたが、この男、実に優柔不断な男でありまして、自分で物事を決められない。では、何故に事業など始め、社長をやっているのかと申しますと親の遺産であります。金があれば男は強気になるもの。真奈美はそんな彼に思いを抱き、一緒になったのですが、暮してみて判った根性無しとだらしなさ。ついに真奈美は離婚を決めてしまいます。別れると言われて意気消沈の社長、慰謝料も真奈美の言いなり。真奈美は、ガッポリと慰謝料を貰ったのであります。が、さて、どうしたものか。真奈美は、これからの人生について高校の同級生に相談したんですな。彼女曰く、
「簡単よ。お店を開くの」
「お店？」

Copyright© H.Mitani

「そう、スナックで良いんじゃない。男の客が、わんさか来るわよ」
「何で？」
「ふふ、女が見ても喰らい付きたくなるようなオッパイ。あなたの武器は、その巨乳よ」
しげしげと己の胸を見る真奈美。そうか、これだッ！　急に目覚めた真奈美は、勇気凛々、スナックを開いたんですな。同級生の言う通り、店は繁盛。客は、ひっきりなしに来る。益々、巨乳に自信を持った真奈美は、世の中の男は我にありと確信してしまう。当たる所、敵なし。ちょっと流し目をして、胸をブルルンと揺さぶると、男は皆、ダラダラと涎を流して寄ってくる。しかし、何か物足りない。肉体的に発達した女は、柔（やわ）な男では物足りない。燃え滾（たぎ）る思いを悶々と内に秘めていましたが、何とそこに学生服を着た木村が現れた。逞しい体。純な瞳。何よりも刺激的だったのは、その臭い。野生を呼び起こすが如き汗臭さ。真奈美は木村を見て激しい世界を想像してしまったんですな。
ま、男と女、縁とは辛いもの。どちらかにとっては良縁と思えるものも、片方にとっては迷惑以外の何ものでもない。果てさて、真奈美は、これからどんな作戦を取ることやら……

（九）

佳奈から真奈美の話を聞いた千津子、右手で伊達眼鏡を勿体ぶって上げながら話し出した。
「あの男、結構、持てる」
と感心しきり。佳奈と野村は顔を見合わせて、そんな馬鹿な……　との様子。
「これは根源的な男と女の関係ね。現代には珍しい現象かも知れない。この事実を見逃す手はないわ。私は知りたい」

Copyright© H.Mitani

やたらと息巻いている。どうしたものかと思案顔の二人に言う。
「相手は、どんな女なのか見なければならない」
と、一緒に真奈美を見にいこうと言い出す始末。佳奈は、別に……と思っていたが野村は違った。ホルスタインの言葉が理性を失わせていた。
「ぼ、僕は社会勉強だと思います。松本の意見に賛成します」
恐る恐るスナックに入る佳奈と千津子と野村。スナック・マナミは混んでいたが、カウンターの中には誰もいない。
千津子が客に訊くと男は隅っこの席を指差した。その席を見ると真奈美がテーブルに置いたスーツに顔を埋め、泣いていた。
野村が勇気を振り絞り、真奈美に近付いた。
「あのー、水割りを下さい」
ガバッと体を起こした真奈美。大きな胸がボヨヨンと揺れる。三人とも目を見張ってしまった。目を真っ赤にした真奈美が面倒臭そうに言った。
「あんたたち、勝手に作って飲んだら……」
「勝手に飲んじゃって良いんですか？」
「煩いわねー。私は、それどころじゃないのよ」
真奈美が、ちょっと正気に戻ったような表情で三人を見た。
「只で良いわ。その代り私の話を聞くのよ」
水割りを勝手に作って三人が真奈美の前に座ると、
「ねぇ、若者たち……恋に歳の差なんて関係ないわよね」
答えに戸惑う三人。真奈美が、また同じことを訊く。
「ねぇ、若者たち……恋に歳の差なんて関係ないわよね」
ねぇ、と言う度に胸が揺れる。野村は、すでに自己を失った境地。じーっと見詰めたまま固まっている。さすがに理論派の千津子。この場を取り繕うつもりか、
「その通りです」
真奈美は一人の意見では納得できないらしく、またもやシツコク同じ

Copyright© H.Mitani

事を訊く。千津子が二人を促す。三人一緒に斉唱した。
「その通りです」
これは功を奏した。真奈美が笑ったのだ。佳奈は笑顔を見て思った。この人、純な気持ちを持っている。真奈美は三人を見詰めたが、大きな瞳からかなり大きめな涙がボロボロと落ちてきた。三人は顔を見合わせた。こんなデカイ涙……
「あの人、手も握ってくれないの」
真奈美は、またスーツに顔を埋め声を上げて泣き出した。これまたデカイ泣き声。佳奈は店を見渡したが、客は誰一人として気にも留めていない様子。果たして、どうすれば良いのか。三人は顔を見合わせ、頷いた。とった行動は、千円札をテーブルに置いて店を出ることだった。
帰りしな、佳奈が千津子に訊いた。
「ねぇ、どうなっているの。あの男の何処が良いのかしら?」
千津子が確信を持って解説した。
「男臭さよ。つまりフェロモンの成せる技。真奈美ママのように肉体的に発達した女は特に感じ易い。その意味では、あの男は確実に持てる」

（十）

佳奈は、浴衣や下駄は持っているが、浴衣姿で外に出たことがない。ほうずき市の当日、佳奈は約束した以上、木村との約束を守ろうと思った。だが、このまま木村の言い成りになるのも癪に触る。
二階の木村の部屋に行った。
「ねぇ、私だけ浴衣っていうのも変じゃない。汗臭い学生服と一緒に歩くなんて嫌だな。木村さんも浴衣にしてよ。さもなければ行く気が起きないわ」
木村は困ってしまった。夏とはいえ学生服で行くつもりだったのだ。

Copyright© H.Mitani

何しろ浴衣など持っていない。だが佳奈の言うことも理解できた。それに情緒を肌で感じたいのであれば、当然、浴衣姿の方が良いのではと思った。

芳江の前で木村が神妙な顔で話している。

「江戸情緒を残すほうずき市。九州にいる時から行きたかったんです。佳奈さんが一緒に行ってくれると言ってくれましたが、お願いがあります」

「まあ、ほうずき市に佳奈とあんたが？　どうなっているの、不思議なこともあるものね。で、お願いって、何？」

「佳奈さんが浴衣って言ってます。浴衣あります？」

芳江は総てを理解した。佳奈と木村が一緒に出掛けるとは実に好ましい事なのだが、問題は浴衣である。男物は孝三の浴衣しかない。木村のサイズに合いっこない。では、買いに行くか。しかし、そんな時間はない。とりあえず孝三の浴衣を箪笥から出して木村に着せてみた。笑いを堪えるのに苦労するほどのツンツルテン。見られたものではない。苦笑いの芳江に木村が言った。

「済みません。ありがとうございます」

木村が部屋を出ようとする。

「隆ちゃん、それで良いの？」

「ちょっと丈が短いですが、佳奈さんとの約束は満たします」

玄関の外で木村を待っていた佳奈。磨り減った下駄を履いて出てきた木村を見て噴き出してしまった。

「やだー、まるで上野の西郷さんみたい」

木村は動じない。笑いを堪えてしげしげと木村の浴衣姿を見ていた佳奈が、ふと呟く。

「そう言えば、同じ隆盛って名前だけど……」

歩き出した二人だが、木村が語り出した。

Copyright© H.Mitani

「祖父と両親の願いらしいんです。西郷さんのような、己の信念を貫く男になれと。それで隆盛と命名したらしいんです」
と言いながら浴衣姿の佳奈に見惚れている。普段はストレートのままの髪を、今はキリリとアップにして引きつめている。瓜実顔に心地良く配置された目鼻と口。木村は、佳奈に浴衣でと言ったが、今まで浴衣姿の女性と二人連れで歩いたことなどない。いや、そもそも女性との二人歩きなど経験がない。木村は幸せだと思った。

浅草寺仲見世通り。思っていた以上に人通りが多い。老若男女が団扇を片手に、ゆったりとそぞろ歩き。浴衣姿の女性も多い。佳奈はと言えば、浴衣と下駄で外を歩くのは初めての経験であり、どうにも歩き難くて仕方がない。だが、それが幸いしたのか実にお淑やかに女っぽく歩いている。ところが木村のツンツルテンは、どう見ても滑稽である。自然、参拝客の興味を引いてしまう。擦れ違うたびに、クスッと押し殺した笑い声が聴こえる。佳奈は、どうとでもなれと腹を括った。誰がどう思おうが私は気にしない。今日だけの我慢で済むではないか。佳奈は、ゆっくりと団扇で風を送りながら涼しげに歩いた。

木村は落ち着きがなかった。辺りをキョロキョロと見ながら、いいな、いいなを繰り返している。粋な紗(しゃ)の浴衣を着て艶っぽく団扇で扇ぎながら歩くお姐さん。アップにした髪と白い項。木村は写真や映画でしか見たことがない。心を奪われ魅入ってしまう。片やお姐さんたち。木村を見て団扇で顔を隠し、プッと笑っている。擦れ違いざま、お兄さん、可愛い、などと戯言(ざれごと)を言う姐さんもいる。若い女性、多分、高校生くらいであろうか、彼女たちも色とりどりの浴衣を楽しんでいる。中には茶髪もいる。それにピアスなるものを耳だけでなく鼻や唇につけている者もいる。オイオイと言いたくもなるが、ま、それはそれで彩(いろどり)を添える。この連中は、遠慮なく衒(てら)いを振り撒きながら歩いている。当然、木村を見れば黙ってはいない。

Copyright© H.Mitani

「ねぇ、あの人、渋ーい！　犬を連れてくれば良かったのにー！」
「超イモイ！　私、あー言うの、絶対にイヤ！」
佳奈の耳にも入るが、私は関係ありません、とソッポを向きながら歩く。木村は何を言われようが、私は関係ありません、とソッポを向きながら歩く。木村は何を言われようが、これもネタには違いないと観察を怠らない。連中に愛嬌を振り撒く積りはないのだが、手などを振ったりする。彼女たちもリアクションがあれば嬉しいもの。
「ヤダー、手、振ってる！　褒められたと思ったんじゃない」
「いくらなんでもそんな事はないわよ。でも、どうしてあんなツンツルテン、着てるんかな？」
「急に成長しちゃったんじゃない」
「あんた馬鹿ね。筍じゃないんだから。安物買ったから、縮んじゃったのよ」
ま、縁日とは心躍るもの。ワイワイガヤガヤ……

「佳奈さん、ほうずき市のご利益（りやく）、知ってます？」
佳奈は下町に生まれ、下町に育った。木村が、江戸情緒、江戸情緒と言うが、佳奈にとっては日常茶飯事の風景でしかない。

――そうなんですな。名所旧跡と言っても、その土地に住んでいる者にとっては自分の庭のようなものであり、周りがいくら騒ごうが格別の思いを持つものではないんですな。
古い話で恐縮ですが、東京タワーが出来た時に、ワンサカと見物人が集まりました。しかし、そのほとんどが東京以外の人だったんですな。では、東京人はどうしていたか。どうせ近くにあるんだし、いつでも行けるんだから、何も人込みの中を無理して行く事もないだろうと高を括っていたんですな。ところが月日が経つと熱も醒めてくる。そのうちに一度も登っていない事に気付きますが、何も今更と結局行かずじまい。歌舞伎や能、茶道も似たようなもので、日本人はどのようなものかは知

Copyright© H.Mitani

っているが、意外と詳細については知らないんですな。むしろ外国の人の方が詳しかったりする。

佳奈は、子供の頃、両親に連れられてほうずき市に来たことはありますが、やたらと人が多いのに辟易し、良い印象は残っていない。ましてやご利益など訊く気にもならなかったんですな。印象に残ったのは、唯一、高く聳える五重塔だけ。

＊

「知らない」

「佳奈さん、今日は特別な日なんですよ。これから観音様に参詣しましょう」

「何故？」

「観音様の四万六千日の功徳日なんです。今日、参詣すれば、たった一日で四万六千日分参詣した事になるんです。そして四万六千日分のご利益が頂けるんです。今日は、有り難い日なんです」

「まー、随分、都合が良い日なのね。ところで、四万六千日って何年分なの？」

木村は、ウッと唸って目を白黒。仕方なく計算しようと思ったが、所詮文学部の学生。暗算は苦手。その点、佳奈は工学部で計算に強い。

「ちょっと待ってよ、えーと、約百二十六年分……ねぇ、ちょっと多すぎない。せめて五年か十年分なら信じたくなるけど、人間の一生より長いなんて、何だか嘘っぽいわ」

「そのような事を言ってはいけません。バチが当たります」

佳奈は、そんなの迷信よ、と言おうとしたが嘘を付いてもらった手前言うのを止めた。それに、考えてみれば超高層ビルの夢は五重塔を見たためである。あながち木村の言うことを否定できないなと思った。

「古い仕来(しき)たりや言葉には、それなりに意味があるものです。だから残っているのです。温故知新、いい言葉です」

Copyright© H.Mitani

ほうずきを並べた露店が、きちんと所狭しと並んでいる。鉢巻に腹巻姿の職人の威勢の良い売り声。髪の毛をキュッと引きつめた女の職人が伝法な言葉遣いをする。これがまた艶っぽさを出している。

しかし、人が多い。二人は、人を掻き分けて本堂の前に立った。

「さ、手を合わせてお願いをしましょう」

ご利益や罰など信じない佳奈であるが、抹香臭い本堂をただの古びたお寺と思ってしまえば、それだけの事である。だが、やたらと神妙な顔で頭を下げる木村を見ると、一応、付き合うかと思ってしまう。お賽銭をあげ手を合わせた。木村を見ると、まだ手を合わせて何かを願っている。佳奈は手を合わせただけだったが、一応、願い事をと、また手を合わせた。

二人は、ほうずきを見ながらゆっくりと歩いた。木村は気になる店があると、熱心にほうずき職人に話し掛けノートを取ったりしている。職人にとっては書入れ時である。邪魔といえば邪魔。しかし、面白いもので木村のツンツルテンな恰好を見ると笑顔になってしまう。客も一緒になって笑ってしまう。笑いは場を和やかなものにする。

「これは、どうだい。見てくれ！　この真っ赤に膨らんだほうずき。良いだろう。大振りのやつが沢山ついてら。それだけじゃないよ。青いやつ。ほれっ、こいつらは日が経てば、でかくなり赤く色づいてくる。長く楽しめるってもんだ。お買い得だよ！」

客も笑顔で貰おうかという事になる。

「ところで、兄さん、どうするんだい」

「いえ、私は……」

四十絡みのこの職人、佇む木村に声を掛けたのだが、これがいけなかった。ところで鉢植えは何日頃から作り出すのですか？　お宅は何代目ですか？　江戸時代には旗本や御家人が内職で作ったそうですが、そこいら辺のこと知ってますか？　季節毎に作る鉢植えですが、ほうずき以外に何を作るんですか教えてくれませんか。

Copyright© H.Mitani

――ほうずき市で、ほうずきを売っているからと言って、全員が植木職人ではないんですな。とび職や大工などの職人も混じっています。江戸時代は、どうだったか知っているか、などと訊かれても答えようがない。商売の邪魔だ。あっちに行ってくれと言いたいところですが、真剣そのものの木村の顔を見ると、そう邪険にも出来ないんですな。これが職人の優しさであります。

＊

「俺は鳶（とび）よ。この場所は代々俺んちが区割りを受けている。何故そうなったかは知らねぇけど……ほうずきは植木職人から仕入れて売ってるのよ。兄さんは大晦日になるとしめ縄とかお飾りを売る屋台を見たことがあるだろう。あれだって同じよ。ま、内職ってぇところだな」

「内職ですか。じゃー、旗本や御家人と同じですね」

この鳶、返事のしようがない。だが、周りには若者たちが耳をそばだてて聞いている。こうなれば何か喋らなければ恰好が付かない。

「昔はな、香具師（やし）とか的屋（てきや）と呼ばれる兄さん、姐さんたちが縁日って言うと店を出したもんよ。区割りは、香具師の親分かやくざが決めてな、やくざの場合は、ショバ代が要るがな。やくざって言うとよー、今の暴力団みてぇなもんだと思うだろうが、昔は正真正銘の義理人情の世界よ。おう知ってんだろうが清水の次郎長。あー言うのが昔のやくざよ」

鳶の兄さん、商売そっちのけで話している。しかし、その辺の事は木村も知っている。

佳奈は、ちょっと離れた所でこの遣り取りを聞いていた。木村が醸しだす一種独特な雰囲気。どうやら木村には、周りの者を引き込んでしまう魅力と言うか、匂いがあるようだ。匂い……佳奈は変だなと思った。今日は木村と歩いていても汗臭くはなかった。答えは簡単だった。洗ったばかりの浴衣。私って何を考えているんだろうなどと思いながらふと気が付いた。下宿人になってから数ヶ月が経つというのに、こうやって

Copyright© H.Mitani

木村を見るのも普通の会話をしたのも今日が初めて。ツンツルテンの浴衣も見ようによっては、木村に似合っている。何故かな？　多分、木村にはひょうきんな所があるのだろう。それに、じっと相手の目を見て話すし、今も目を大きく開けて聴き入っている。ひょっとすると嘘偽りのない人間なのかも知れない。つまり、その儘の自分を出しているのかしら。

ちょっと待ってよ。嘘をついてくれと頼んだら、ほうずき市だと言った。江戸情緒を肌で感じたいとの言葉に、つい、ＯＫしてしまったが、何も私でなくても良かったはず。そうよ、真奈美さんの方が……彼女であれば、一も二もなく喜んでＯＫだったはず。もしかしたら気を利かせて寸法の合った浴衣を用意したかもしれない。胸と尻は出過ぎだとは思うが、あのバディーを浴衣に包めば女の私でもムンムンとした女の艶気を感じるはず。ほうずき市で艶気タップリな女が団扇で風を送りながら、揺れる所は揺らし、下駄を爪先立てて歩いている姿。佳奈は思わずゴックンと生唾を飲み込んだ。彼女の方が、木村が言った江戸情緒としての必要かつ充分条件を満たしている。

佳奈は、今まで、このような事を考えたことも想像したこともなかった。何故、私なの？　あの木村って、何を考えているのかしら。

佳奈は、混雑したほうずき市の雰囲気に戸惑いを感じながらも、一人で歩き出した。

若い女子たちが笑い声を上げながら楽しそうにほうずきを見ている。言葉は交わさないが幸せそうに赤ん坊を抱いて、ゆっくりと歩く若い夫婦連れ。ちょっと緊張気味な二人連れ。付き合いだして、まだ日の浅い恋人同士であろう。恋など経験したことはないが、佳奈にも判るその初々しさ。佳奈は、木村と二人で歩く姿を思い出してみた。

「やだー、全く違う！」

急に大声を出して笑い出した佳奈を、周りの参詣者たちが驚いて見た。さすがに佳奈も真っ赤になってしまった。

Copyright© H.Mitani

威勢良く声を張り上げほうずきを売る人たち。イナセで粋な売り姿。あの人たちにも夢があるんだろうな。佳奈は、ふと夜空を見上げた。そこには佳奈に夢を授けてくれた五重塔が、光の中で聳え立っている。

「フフ、お願い。私に超高層ビルを造らせて。私、お願い事などしたことがないの。でも、さっき観音様にも同じ事、お願いしちゃった」

露店に目を移すと可愛いほうずきがある。欲しい！　佳奈は、財布を持ってきていない事に気が付いた。浴衣など着たことがないからだ。

佳奈は木村の所に走っていった。ところが履き慣れない下駄である。佳奈は叫び声をあげてスッテンコロリンと転んでしまった。叫び声を聞いた木村が走ってきた。

「佳奈さん、大丈夫ですか」

「あ、足が……」

佳奈は足首を押さえている。

木村は佳奈の横にしゃがみ込み、真剣な顔付きで佳奈の足首を看ている。剣道などをやる者は怪我などに詳しい。佳奈は木村から眼を離せない。しかし、痛い。

二人の周りに人垣が出来てきた。

「お寺さんに相談した方が……」

「救護班が待機していたはずだ」

「いや、救急車を呼んだ方が……」

いろんな声が掛かる。木村は足首を摩ったり押したりしている。足首が腫れてきた。佳奈は痛くて仕方がないのだが、妙なものが目に飛び込んできた。夢中になって佳奈を看ている木村の浴衣の裾、そうでなくともツンツルテンである。何と浴衣の裾が開き、股間（こかん）が丸見え。目に飛び込んで来たのは真っ白な下着であった。佳奈は顔を赤くしたが、へー、下着は、きちんと取り替えてるんだ、などと、あらぬ事に感心してしまった。

「佳奈さん、捻挫ですね。こんなに腫れている。普通は何時間か後に腫

Copyright© H.Mitani

れてくるんですが……ちょっと酷いですね。これでは、当分、歩けませんよ。僕が一緒に居ながら済みません」
謝られるとは思ってもいなかった佳奈、
「わ、私がいけなかったのよ。急に走ったりしたから」
「家に帰りましょう。帰ったら女将さんに牛肉を頼みます」
牛肉？　な、何でこんな時に牛肉なのよ。私は別に食べたくないわ！と言おうとしたが、木村が、
「腫れた捻挫を冷やすには牛肉が一番、効くんです。ちょっと勿体ないけど……」
へー、そうなんだ。結構、頼りになるじゃないこの人、などと感心していると木村が佳奈の下駄を浴衣の袖に入れた。何をするんだろう？何と木村は、軽々と佳奈を抱き上げ、お嬢様抱っこをした。あっと言う間の出来事であり、佳奈はビックリ眼（まなこ）で木村の顔を見上げるだけ。
喜んだのは周りの連中。
「よっ！　お二人さん！」
「羨ましいなー。いいなー。お姉さん、ズルイっ！」
「良いねー、若いもんは。妬けるよっ！」
「兄ちゃん、恰好良いよっ！　いよー、玉屋ー、鍵屋ーッ！」
何とも騒々しい。挙句の果てには拍手などを仕出かす始末。中には、三三七拍子を始める連中もいる。
佳奈は、足の痛みなど何処かに素っ飛んだ気分。恥ずかしいやら照れ臭いやら。しかし、どうしようもない。それに、やたらと周りの連中の顔が間近に見えてしまう。これは堪らんと、佳奈は思わず木村の胸に顔を埋めてしまった。これがいけなかった。なお一層、周りからヤンヤヤンヤの歓声が上がった。木村はと言えば、別に、との涼しげな表情でいる。
「皆様、ご心配をお掛けしましたが、私が責任を持って家に送り届けます。どうか、ご安心ください。では」

Copyright© H.Mitani

などと律儀な挨拶をした。周りから、さらに大きな拍手が起こった。
大勢が見守る中、木村は厳かな雰囲気で歩き出した。
「佳奈さん、急に走り出すなんて、どうしたんですか？」
佳奈は、聴こえるかどうか判らないくらいの小声で言った。
「可愛いほうずきがあったの。欲しくなっちゃって……でも、お財布、忘れてきちゃった」
「どの店ですか？」
佳奈が指差すと、木村はその店に向かった。見れば可愛いほうずきの鉢植え。粋に締めたねじり鉢巻が良く似合う六十歳を過ぎた様子のおっさん、
「ヨッ！　さっきのお二人さん。なー、四万六千日だ！　良いもん見せてもらったよ。仲良く遣るんだよ。喧嘩なんかしたら、俺が許さねぇからな。どうだ、約束するか」
何とも妙な雰囲気である。許さないって言ったって、おじさん、どうするつもりなの、なんて訊いたら何をされるか判らない感じである。佳奈が、
「はい、判りました」
と言ったが、おっさんの許可が下りない。
「あのねぇ、約束って言うのはね、きちんと二人揃って約束します、って声を揃えて言わなくちゃ駄目なんだよ」
別に酔っているようには見えないが、かなりしつこい。二人は声を合わせて、
「約束します」
「駄目だ、それじゃ駄目だ。何を約束したのか判らない。やり直しだ」
こうなれば二人とも自棄（やけ）気味である。大声で言った。
「喧嘩しないで仲良く遣ります。約束します」
「うーん、良いな。良い。惚れ惚れすらー。若い頃の俺と婆さんにそっくりだ。今頃、婆さんも天国で二人を見ているだろうよ。俺は、婆さん

Copyright© H.Mitani

に苦労ばかり掛けちゃったからな」
何やらこのおっさん、しみじみとしだした。見れば鼻をグスングスンしている。木村が恐る恐る言った。
「あのー、ほうずき……」
「おう、忘れてた。どれが良いんだい」
佳奈が指を差すと、鉢植えをビニール袋に入れ、先っぽを結わえた。
「お幾らですか？」
「なにー、幾らだと！　このオタンコナスが！　詰んねぇことを訊くもんじゃねぇよ。この心温まる雰囲気の中で、イナセな八五郎の渾名を持つこの俺が、金を取るとでも思っていたのか！　この馬鹿野郎！」
「す、済みません」
鉢を受け取ると、運良く他の客がおっさんに話し掛けてくれた。
木村は、そっと佳奈を下ろし、
「佳奈さん、鉢を持ってくれますか。おんぶしましょう。こっちの方が歩き易い」
と、佳奈に鉢を持たせ、おんぶした。
背中の佳奈だが、先ほどの光景を思い出していた。
木村の逞しい胸と腕。恥ずかしさから木村の胸に顔を埋めてしまったが、初めて経験した安堵感。そして、胸のときめき……汗臭さではない木村の匂い。佳奈は、もう一度、思いっきり意識して鼻をピクつかせてみた。仄かに感じる匂い。そして、何かがツクンと胸を刺すこの匂い。石鹸でもナフタリンでもない。何なんだろう？　佳奈は理解できないでいた。

（十一）

速水荘に着いた時、佳奈は木村の背中で眠っていた。

Copyright© H.Mitani

驚いたのは芳江と孝三。見れば佳奈は眠っている。二人は顔を見合わせ、小声で訊いた。
「ねぇ、どうしたのよ？　何が起こったのよ？　なんで佳奈をおんぶしてるの？　佳奈は寝てるじゃない。お酒でも飲んだの？」
木村は右手を前にもっていき、しーっと指を口に当てた。
「詳しくは後で。佳奈さんの部屋に布団を敷いてくれませんか」
慌てて居間を出て階段を駆け上がる芳江と孝三。その後を木村が付いていく。
木村が佳奈の部屋を覗くと、二人が小声で言い争っている。
「何で、あんたが来るのよ」
「非常事態だろう。俺にも手伝わせろ！」
「今まで佳奈の布団を敷いたことなんてないでしょう。邪魔よ！」
孝三、隅っこでオロオロしている。布団が敷かれると、木村は、そっと佳奈を布団の上に寝かせた。
「さ、あんたたちは下に行って。寝巻きを着せるから」
スゴスゴと階段を下りる二人。居間のソファーに座り、フーッと大きな息を吐いた。
「木村さん、話してよ」
「女将さんが来てからにしてください。いろいろあったもんですから」
どちらかと言えば、いつも元気いっぱいに話しをする木村であるが、今は違った。孝三は貧乏揺すりを始めた。
「またー、止めてって言ってるでしょう。貧乏揺すり」
居間に入ってきた芳江が怒鳴る。芳江を見た木村が言った。
「あのー、牛肉、あります？」
キョトンとする芳江と孝三。考えてみれば、この二人も可哀相なもの。驚いたり面喰ったり、気の休まる隙がない。
「あ、あるわよ。冷蔵庫に……」
「挽肉じゃ駄目ですよ。切り身です」

Copyright© H.Mitani

「あ、あるわよ、明日、サイコロ・ステーキにしようと思って」
「一枚、くれますか」
また、貧乏揺すりを始めた孝三。もう貧乏揺すりなど、どうでも良いと無視しだした芳江。孝三が言った。
「木村君！　君の腹を満たすことなど、どうでも良いだろう。好い加減にしたまえ！」
「そうよ、この人の言うとおりよ！　木村さん、この人だって、たまには真面な事を言うんだから。ねぇ、佳奈は、どうしたっていうの？」
「お話しする前に、牛肉と手拭いを下さい。佳奈さんの足首に巻きますので。佳奈さん、捻挫しちゃったんです。済みません」
ハハーンと頷く孝三。孝三は、牛肉の効用を知っていた。
「捻挫を冷やすのか。君ねぇ、だったら、もっと早く事情を話してくれないと困るじゃないか。食事かと思ってしまったよ」
芳江が冷蔵庫から牛肉を出した。孝三は風呂場から手拭いを持ってきた。三人揃って、そーっと階段を昇る。
佳奈は、スヤスヤ眠っている。抜き足差し足の三人。まるで泥棒である。木村が掛け布団の裾を上げ、佳奈の右足に牛肉を当て、手拭いで縛った。また、泥棒姿の三人が階段を下りる。
「さー、話してもらおうか。木村君！」
孝三の態度が普段と違ってデカイように思える。理由は簡単である。先ほど、たまには真面な事を言うでしょう、との芳江の言葉に勇気を得たのである。大手電機メーカーの技術部長も家に入ればこんなものである。人間は、これで良いのである。
木村は自分の記憶を辿り、訥々（とつとつ）と話し出した。
木村の記憶力はきちんとしていた。時間的経過を追って懇切丁寧に話す内容は、寸分たりとも事実との間に差はなかった。芳江も孝三も笑いを堪えるのに困るほどの鮮明なる事実描写。思いを込めて書けば物語りになる。

Copyright© H.Mitani

「木村君、笑える話だが、君は何故、佳奈を誘ったのか、其処のところがハッキリせん。父親として明確に知っておきたい」
「あんた、ナニ馬鹿を言ってるのよ。そんな事、あえて本人に訊くなんて。そう言うのを野暮って言うのよ」
「野暮？　俺は野暮か？」
大きく頷く芳江を見て、孝三は元の孝三に戻ってしまった。

（十二）

佳奈の部屋。佳奈が携帯電話をかけている。
「千津子、あのねぇ、私、変なの」
佳奈が事と次第を細々と話している。
「そうなのよ、千津子。胸がときめいたのよ。この私が……。それに、今まで嗅いだことのない匂い。それが不愉快じゃないの」
千津子が理路整然と解説しだした。
「佳奈さん、私、ハッキリと申します。まず五重塔に憧れ、超高層ビルを建てたいとの夢は逞（たくま）しき男を求めている証拠です。良いでしょうか、五重塔とは男根の象徴であります。幼い時に、それを感じたとは、貴女は、自分では気付いていなくても、早熟です」
「私が、早熟！　それに男根なんて。千津子、言い過ぎよ！」
「決して言い過ぎではありません。潜在的な欲望や欲求、性欲は、本人が気付かないものなのです。そこが面白くもあり、その人の人生を狂わせたりします」
「随分、はっきり言うわね。確証はあるの？」
「かのフロイトは……」
「判った！　ここでフロイトの話なんて、電話が長くなるだけよ」
「では、続けます。佳奈さんは、彼の汗臭さに辟易としていましたね。

Copyright© H.Mitani

この感覚は一般的に言えば、ほとんどの女性に当てはまる事象です。しかし、汗臭さ以外の匂いを感じ、それに対して貴女は別に不快感を持たなかった。この匂いこそ、まさに木村のフェロモン。それを嗅いで胸がときめいたとは、貴女と彼は肉体的に相性が良いことを示してます。誠に残念ながら、いえ、ご愁傷様と言った方が良いかもしれませんが、佳奈さん、貴方はもはや、あの男から逃れる事はできません」

「……」

「佳奈さん、聞いてるの？」

「聞いてるわよ！」

「ところで捻挫の方は、どうなんですか？」

「酷いらしいの。医者は一、二週間は寝てろって。授業は気になるし、千津子、そもそも野村がいけないのよ。門限を間違えちゃって！　それに、木村が浴衣なんて言ったのがいけないのよ。頭にきちゃうわ！」

電話口から千津子の笑い声が聴こえてきた。

「千津子、笑ってるの！　いい加減にしてよ！　人の不幸を笑うなんて、地獄に堕ちるわよ！」

「佳奈さん、覆水盆に返らず。起こってしまった事を元に戻すことは出来ません。私は、今回の出来事、佳奈さんにとって幸せなことだと思っています」

「幸せ？」

「えー、お陰で佳奈さんは、性に目覚めた」

「なにーッ！　千津子！　今度、会ったらぶっ飛ばすからね。覚えていなさい！」

（十三）

速水家の居間、ソファーに芳江と真奈美が座っている。二人とも硬直

Copyright© H.Mitani

したまんまの状態で対峙している。テーブルの上には水羊羹の箱が置いてある。
「いえね、今日はお願いがありまして……」
真奈美が箱を芳江の方に動かす。
「お願い、ですか」
「ええ、奥様、私、スナックを経営していますでしょう。お客様と呑んだり喋ったり。楽な仕事だとお思いでしょうが結構疲れますのよ」
ブラウス姿の真奈美が、オッホッホと笑ったが、笑う度に巨乳がユッサユッサと揺れる。芳江は目のやり場に困ってしまう。
「いろんなお客さまがいるのでしょうね。そうでしょうねぇ。疲れるでしょうねぇ」
「いえ、私が疲れますのは通勤なんですのよ」
「通勤？」
「えー、電車に乗って……」
「あら、駅はどちらですの？」
「隣り駅ですけど」
「まあー、近いじゃないですか。あーそうか、お住まいが駅から遠いんですか？」
「いえ、駅前のマンションですけど」
「じゃー、十五分もあれば通えますよね」
「えー、でも、電車の乗り降りが疲れますの」
芳江、真奈美が何しに来たのか判らないでいる。
「そうですか、大変ですね。で、今日、お越しになりましたのは？」
「こちらにご厄介になろうかと思いまして」
芳江が目を剥く。
「ご、ご厄介って、ま、まさか」
「そうですのよ。下宿させていただこうかと思いまして。宜しくお願いいたします」

Copyright© H.Mitani

真奈美、深々と頭を下げた。
「エーッ！」
芳江は仰け反ったまま口をあんぐりと開けてしまった。
「いえね、こちらからですと五分ほど歩くだけで職場に行けますの。こんな楽な事はありませんわ」
芳江はピンと来た。木村である。そこまで、この女は遣るのか。ある意味では大した女だと思ったものの、真奈美が木村の傍の部屋で寝起きするなど、考えただけでゾッとする。如何にして断るか。止せばいいのに常套句を使ってしまった。
「申し訳ありません。部屋が塞がっていますのよ。ごめんなさいね」
「あら、変ですね。私、ご近所から、いつもお部屋はガラガラだと聞いていますのよ」
芳江は、しまったと思ったが、下宿屋の女将ともなれば負けてはいない。
「えー、学生さん用の部屋は空いてますよ。でもね、社会人用の部屋は空いていませんの」
「社会人用の部屋？　そんな区別、あるんですか？」
相手に疑問を持たせれば、こちらの勝ちである。
「当たり前です。真奈美さん、親の脛を齧っている人間と自活している人間と同じだと思いますか。違うでしょう。当然、部屋も違います」
「奥さま、今は学生さんが一人だけじゃないですか。その学生さん、社会人用の部屋に下宿してるんですか。お話が合いません」
芳江は勝ったと思ったのだが敵もさる者、形勢は不利になってしまった。何とか敵を退散させなければならない。
「仰るとおりです。実は此処だけの話ですが、故あってその学生さんを社会人用の部屋に下宿させています」
「故あって？　お訊きしたいですわ、私……」
「お会いするのが二度目の貴女に、そんな重大な事をお話しする謂れは

Copyright© H.Mitani

ありません。お引き取り下さい」
　芳江は、ついに引き取れと言ってしまった。いきり立ったのは真奈美。デカイ胸を前に突き出し、威圧するように話し出した。
「私が犯罪者であったり素行の悪い人間であればまだしも、私は真面目に誠実に生きている女です。それを貴女は拒んでいる。このような仕打ち、商法にも違反します。いえ、これは差別です。私の何処がいけないんですか。私、区役所に行って、この速水荘の営業停止を申請します」
　何とも話が大きくなってしまった。芳江も真奈美を断る理由がない事は認識している。営業許可は単に下宿として受けている。芳江は完全に降伏寸前の状態になってしまった。
　そこに孝三が何の刺激も感じないノホホンとした顔で帰ってきた。孝三が居間に顔を出すと、芳江と知らない女がいる。どうした訳か芳江は硬直しているように見える。
「お帰りなさい。ちょうど良いわ、貴方も話を聞いてください」
　芳江は頼りないとは言え、味方になってくれると思ったのだ。孝三が真奈美に会うのは初めてである。真奈美を見た孝三が年甲斐もなく呟いた。
「す、凄い！」
　真面目一方の孝三である。浮気したこともなければソープランドに行った事もない。知っている女は芳江だけ。しかし、男は誰しも妄想に耽るものである。孝三も何度となく女との激しい欲情の場面を妄想したりする。ところが真奈美は思い描いた女にそっくりなのである。呆けた顔で真奈美を見つめる孝三。芳江は、自分の亭主が普段と異なる雰囲気に浸っていると思った。
「あのー、旦那さまでしょうか？」
　孝三、如何にもと頭を下げると、真奈美が丁寧に、
「真奈美と申します。どうぞ宜しくお願いいたします」
と挨拶した。

Copyright© H.Mitani

名前を聞いた孝三、例のスーツ事件を思い出した。だが、今回の事情については判らない。芳江を見て、どうしたんだ？　と言う顔をした。これを受けて芳江が事と次第を話した。真奈美は耳をそばだてて芳江の一言一言を確認している。その度に頭を振るが、多少の時間差でデカイ胸も揺れる。孝三の注意力だが、半分は芳江の話に、半分は真奈美の胸に注がれている。

「ねぇ、貴方、速水荘では社会人の方はご遠慮いただいているんですよね」

――孝三は、次のように考えたんですな。

「遠慮してもらっているのではなく、今まで学生しか来なかったのだ。従って、不動産屋の案内書などに学生以外は断りなどと謳ったことはない。また、完全なる公共施設ではないにしても、下宿屋である以上、公共性は保たなければならないはずだ」

実にまともな考えですな。

「では真奈美が下宿した場合、速水荘にとって、どのような利害があるのだろうか。下宿代は入るが大した利益ではない。そもそも下宿屋を続けている理由は、芳江の趣味のようなものである。しかも学生であるからこそ芳江のお節介焼きの性格が充たされるのである」

これまた、冷静なる分析であります。

「では自分にとって、どのような利害があるのか。妄想の中の女が同じ屋根の下で現実的に寝起きする。暑い日などは薄着でこの下宿を歩き廻るかも知れない。ひょっとすれば、ネグリジェ姿かもしれない。目の保養には絶好である」この辺で孝三はニヤリとした。「悪くない。しかし、待てよ。定年退職を五年後に控え、落ち着かない毎日を送ってしまうのではなかろうか。仕事中にネグリジェ姿を思い出したりしたらミスを犯すかも知れぬ。これは拙い。輝かしい我が経歴に瑕を付けてしまうかも知れない」

Copyright© H.Mitani

ま、人間とは、己が一番大切なのでありますな。

＊

孝三が、したり顔で話し出した。

「真奈美さん、この速水荘は基本的に学生相手の下宿屋です。今、下宿人は男子学生、一人だけです。仮に貴女のような素敵な方が下宿したといたしましょう。果たして彼は落ち着いて勉学に励むことが出来るでしょうか。私は疑問です。この私ですら……。いえ、私の事はさて置き、彼が勉学に勤しむことが出来なければ落第してしまうかも知れません。つまり、貴女の所為で彼の人生は目茶目茶になるかも知れません」

滅多に孝三の長口上など聞いたことがない芳江、あらこの人、どうしちゃったのだろうと不安げな顔付きになってしまった。一方、真奈美だが、孝三が言った、貴女のような素敵な方との言葉に酔い痴れているらしいく顔付きが和(なご)んできた。

「真奈美さん、彼を落第から救えるのは貴女だけです。どうでしょう、通勤だけが問題でしたら、ワンルームマンションでもお捜しになってはどうですか。私もお手伝いしますよ」

真奈美は孝三の話に一々頷いた。孝三は、その度に真奈美の揺れる胸を眺めながら、我ながら理知的な話をするものだと悦に入っている。

芳江は、孝三の話が飛躍しすぎていると思ったものの何となく方向性は間違っていないように思えた。

「あのー、木村さんですが、私が下宿したら落ち着いて勉強できなくなるでしょうか？」

「勿論です」

「何故でしょうか？」

芳江は、二人の会話を聞いていて阿呆らしくなってきた。この女、孝三に誘導尋問を仕掛けている。孝三の答えは決まっている。さっき貴方が素敵だからと言ったではないか。

Copyright© H.Mitani

「枯れ掛けたこの私でさえ、貴方の魅力に心奪われる思いがいたします。ましてや、血気盛んな若い男性であれば、貴女を見た百人が百人、心奪われるは必至。我が下宿人も必ずや虜になってしまうはずです」
芳江が、ムッとした。こんな殺し文句、私は言われたことがない。真奈美は恍惚状態に入ったようだ。
「私、お店、やってますでしょ。不思議だなと思うことがありますの」
「ほー、それは、どのような？」
芳江は、馬鹿馬鹿しくなって席を外そうかと思ったが、孝三の目付きを見ると、監視していた方が良いだろうと腰を落ち着けた。
「男のお客さまばかりですの。いえね、カップルも来ますのよ。ところが、次回からは男の方がお一人で来るようになりますの。それにお店にいますと痛いほどお客さまの視線を感じますの。もしも旦那さまのお言葉が本当だとすれば」
「もし、ではありません。私は嘘をつきません」
「では、お客さまは皆さん、私の事を……」
「えー、そうですとも。皆、真奈美さんに心を奪われているのです」
「嬉しいーッ！」
何と真奈美は、両手を胸の前で合わせ、体を思いっ切り振った。物凄い揺れ。まるでその場の空気が撹拌されるが如き有様。孝三は、もう遠慮もせずに見詰めている。
「真奈美さん、是非、一緒にマンション捜しを」
ふと我に帰った真奈美、
「私、我慢します。木村さんのために通勤の苦しさに堪えます」
何やらガッカリした顔の孝三。呆れ顔の芳江。
この二人の前に立ち上がった真奈美が、
「辛い人生ですが、私、頑張ります。旦那さま、一度、お店にお越しくださいな。また、人生訓話をお聞きしたいです。では」
と言ったかと思うと、尻を振って、さっさと帰ってしまった。

Copyright© H.Mitani

芳江が言った。
「馬鹿！」

（十四）

天気の良い朝、芳江が木村の部屋のドアを叩いている。
「どうぞ」
芳江が部屋の中を覗くと、木村は例の浴衣を着ていた。気に入ったと言うので進呈したのだった。芳江は部屋に入ったが、意外な思いに駆られてしまった。余り汗臭くないのだ。芳江は木村が居るのにも関わらず実に失礼な事に鼻をヒクヒクさせてしまった。
普段大人しい木村だが、やはり気になったのか、
「女将さん、臭います？」
「い、いえ。ご免ね、本人の目の前で」
「い、いえ。最近、考えが変わったんです」
「考えが変わった？　隆ちゃん、どう言うこと？」
「何だか、女性は汗臭いのが苦手なようなんで」
「女性は、って言うけど、隆ちゃんはどう思っているの？」
「私は大好きなんです。汗の匂いは勇気を奮い立たせてくれます」
「勇気？　隆ちゃん、何に対する勇気よ。剣道の試合なら判るけど、普段は勇気なんか関係ないんじゃない」
「生きる勇気です！」
「大袈裟じゃない。あたしなんか、そんなこと考えなくても結構好き勝手に生きて来れたわよ」
「私は九州鹿児島で畑や牧草地、牛や羊たちと暮してきました。ちょっと気障（きざ）な言い方ですが自然と共に生きてきた訳です。そこには常に肉体を感じさせる出来事が起こります。台風、日照り、それに桜島の噴火。

Copyright© H.Mitani

牛や羊の出産。その度に汗だくになって体を動かします。大地の上に暮らす生き物の姿があります」

芳江は木村の事を知っている積りだったが、このような話を聞くとは思ってもいなかった。この男、ただの風呂嫌いではなかった。

「ねぇ、何で剣道を遣ったの？」

「……悲しい事に、人間のＤＮＡには闘争心が組み込まれています。一人一人を認め、互いの幸せを願えば良いのに現実は違います。私は自分の闘争心を自分に向けようと思いました。戦う相手は自分です。しかし、どうすれば良いのか判らなかった。そんな時です、五輪書に出会ったのは」

「隆ちゃん、判ったわ。五輪書を読んで武蔵のように強くなりたいと剣道を始めたんだ」

「あのー、ちょっと違うんです」

芳江は木村の事を素直一辺倒な男だと思っていたが、違うと言われ、体の力が抜けるように思った。

「五輪書には、しつこいほど、研鑽（けんさん）と言う言葉が出てきます。私は、これだと思ったんです。研鑽とは自分に対する言葉です。しかし、手段が判りません。だったら武蔵と同じ剣道を遣ってみよう。そこで遣ったんです、剣道を！　生き返りました」

人に歴史あり、なんて言葉が芳江の頭に浮かんだ。畳の上にペタンと座ったままの芳江。あらまー、いろんな事があるのねー、生きていると。なんて感慨に耽（ふけ）ってしまった。

「ところで女将さん、何か用事でもあったんじゃないですか？」

芳江は我に返ったが、どうも切り出し難い。真面目な木村に大學をサボってくれと頼みたいのだ。ＯＫしてくれないのではないか。女将さんを見損ないましたなどと言われたら、これからの木村との関係が不利になってしまう。

「あのね、今日、三味線の発表会があるの」

Copyright© H.Mitani

「そうですか。三味線かー、三味線も知っておいた方が良いのかな」
「えっ？」
「いえ、こちらの話です。発表会がどうしたんですか？」
「鈍いわね。佳奈よ！　捻挫した娘をそのままにして発表会になんか行けないじゃない」
「そりゃ、そうですよ。そんな理不尽な事、母親として出来る理由がない。簡単ですよ、行かなければ良いんですから」
芳江は、たじろいだが、
「あのね、隆ちゃん、世の中にはね、色々とお付き合いってものがあるのよ。こう見えても私は三味線のお師匠さんよ。お弟子さんも居るし他のお師匠さんとの顔つなぎもあるのよ。それに……義理や仕来たりもある。人間て、そんな中で生きてるのよ」
「あのー、そう言う事って、女将さんにとって大切な事なんですか？」
「なに言ってるのよ。誰だってそんな中で生きてるのよ」
「なるほど。良い話を聞きました。で、ご用件とは何ですか？」
芳江は、すんなりと頼んだ方が良かったのかな、などと悔やんでしまった。本題に入るまでに思っていた以上に時間が掛かっている。このような場合は、兎角（とかく）、上手く行かないことが多い。芳江の頭の中は不安感だらけ。
「あのね、私は学生の本分は勉学にあり、と思っているのよ。でもね、世の中のしがらみに依っては、勉学を一時的にお休みしても良いと思っているの」
「……」
「ねぇ、一日ぐらい授業をサボっても、これからの人生に影響なんてないと思わない」
「少年老い易く 学成り難し、光陰矢の如し」
芳江は諦め掛けていた。孝三に頼んで会社をサボって貰ったほうが良かったのか。

Copyright© H.Mitani

「そうよね、昔の人は良い事を言うわねぇ」
芳江は、お邪魔しましたと帰ろうかと思った。
「私は小学校から今日まで、無遅刻無欠席。ましてや、サボったことなどありませんが、で、女将さん、サボる事と私とが、どのような関係にあるのですか」
芳江は根性を込めて言った。
「お願い！　今日一日、大學をサボって、佳奈の看病をしてくれない」
芳江は、自分がこれほど真剣に人にものを頼んだことなど無いなと思いながらも返事を聞くのが怖かった。
「良いですよ」
拍子抜けした芳江。半世紀と二年も生きて来たが、今日、新たなる教訓を得た。
案ずるより産むが易し。

会談終了後、二人して階下に降りた。芳江は、いそいそと出掛ける支度をしていたが、傍に居る木村に言った。
「水羊羹が冷蔵庫に冷やしてあるの。食べても良いわよ」
それなりに着物を着込んだ芳江は、じゃー、後は宜しく、と、晴れやかな雰囲気で木村に言い残し速水荘を出て行った。

（十五）

浴衣を着た木村が、佳奈の傍で胡坐を組んで座わっている。
「……という事で、私が看病を任されました」
と、本を読み出した。
佳奈は、布団の中で横になっているが、眠っている訳ではない。頭は冴えっ放しである。言うまでもなく、千津子のご神託が頭から離れない

Copyright© H.Mitani

のである。何の屈託もない表情の木村であるが、傍に居るだけで落ち着かないのである。しかも汗臭さがないため不快感もない。それどころか何も匂わないのだ。千津子は、フェロモンと言っていたが、その匂いもない。あれは何だったのか。もう一度、確かめてみようかなどと有らぬ事を考えてしまう。しかも先ほどから目のやり場に困っている。ツンツルテンの浴衣で胡坐。木村の股間が丸見えなのである。見えるわよ、と教えてあげようと思ったのだが、すでにその機会は逸している。座ってすぐに見えるわよと言えば、あ、そうですか、で事は済んだはずであるがすでに二十分近くが経過している。もし今ごろになって言ったとすれば、佳奈さんは、ずーっと私の股座を見ていたんですかなどと言われかねない。これでは、品位、品格を疑われてしまう。これは拙い。とにかく、あらゆる意味で落ち着かないのである。

「ねぇ、看病してくれるのは嬉しいけど、一日中、そうやって本を読んでる積りなの」

木村が佳奈を見つめて言った。

「そう言われれば、そうですね、これじゃー佳奈さん、落ち着いてオナラも出来ないでしょう」

こ、こいつは何を言い出すのだ！　淑女に向かってオナラとは！　佳奈は、ムカッとしたが、これまた言われてみれば、その通り。気付けば急に腹が張ってきた感じがする。

「じゃー、また来ます。何か用事があったら声を掛けてください。あ、それからオナラをするんだったら、体を横にして海老のような恰好をした方が出し易いですよ。念のため」

な、何が、念のためだ！　木村は部屋を出て行った。佳奈は本当だろうかと体を横にしてみた。海老の恰好って言ってたわね。そのようにしてみた。プーッ！　佳奈は、笑い出してしまった。何と素直な我が肉体。それと同時に顔を真っ赤にした。

「聴かれなくて良かった」

Copyright© H.Mitani

しかし、木村が居なくなると何故か詰まらない。窓辺には、ほうずきが置いてある。佳奈は赤く色づいたほうずきを見ながら、浅草寺の境内での出来事を思い出した。

「フフッ！　楽しかったな。お嬢様抱っこって、結構、素敵」

なんて、乙女チックな気分に浸っているとドタドタと足音が聞こえてきた。

「佳奈さん、女将さんが水羊羹を冷やしておいてくれました。一緒に食べましょう。この前も女将さんから水羊羹、貰ったんですが、あの時のに比べ、これは凄い豪華な感じですよ。この水羊羹、どうしたのかな」

「ねぇ、ちょっと、何てこと言うのよ。じゃー、我が家の水羊羹は安物で、これは誰かから貰ったものだとでも言いたいの！」

「そ、そんな事は……」

と木村は取り繕ったが、多分、これは贈答品だなと確信した。

佳奈は体を起こし、木村から水羊羹を受け取った。確かに我が家で買うものとは違っている。誰から貰ったんだろう、などと考えながら食べたが、佳奈の手から水羊羹が落ちてしまった。

アッ！　と言って屈んだ拍子に、二人が頭をゴッチンコ。

「大丈夫ですか」

と木村が佳奈の額に手をやり、顔を覗きこんだ。

佳奈の取った行動は、完全に無意識なものであった。佳奈が木村の顔を両手で掴んだ。そして自分の方に引き寄せ、ブチュッとキスをした。

驚いたのは木村である。顔面蒼白。だが、即、事態を把握した。その途端に櫻島の噴火にも匹敵するほど真っ赤になった。山門に鎮座する朱塗りの仁王様のような形相。気絶はしないまでも、真っ赤に膨れ上がった木村。ウーンと唸りっ放し。

佳奈はといえば、バタンと布団に体を倒し、

「わー、キスしちゃった！　フフッ、初めての口づけー！」

と喜色満面である。多少、我を取り戻した木村が、それでも真っ赤な顔

Copyright© H.Mitani

で言った。
「柔らかいんですね、唇って……」
胡坐を掻いたまま、自分の右手を口に当てている。何とも女々しい姿。見られたものではない。木村の言葉を聞いた佳奈が顔を横にした。目線と水平な位置にあったのが木村の股間である。佳奈は、ビックリして呟いた。
「す、凄いテント！　それに、何だか規則正しく動いてる」
佳奈は千津子のご神託を思い出した。
「五重塔だわ。でも、これは、風に揺れる五重塔。見たいなー」

（十六）

速水家の居間である。
木村が芳江と孝三を前に、やたらと神妙な顔付きで座っている。夫婦は大切な話があると木村から言われていたのだ。木村は、きちんと学生服を着ている。それに、必要ないのではと思うが、テーブルには学帽が置いてある。何故に、帽子が？　ま、それはさて置き、三人とも硬直している。芳江と孝三は顔を見合わせ、何か言えよと目で合図を送り合っている。木村が意を決したように深々と頭を下げ、厳かな口調で話しだした。
「私、木村隆盛、今日、お二人に命を掛けてお願いに参りました」
お願いに参りましたと大仰に言ってはいるが、高々、ちょっと階段を下りるだけではないか。また二人は顔を見合わせた。
「な、何なりと仰ってくださって良いのですよ」
芳江の口調も何処かおかしくなっている。孝三は腕を組み、果たして何が起こることやらと顔面に皺を寄せている。
「私めは、速水家ご令嬢、佳奈さんといずれ夫婦（めおと）になりたいと思い、お

Copyright© H.Mitani

許しを頂きたく参上いたしました」
二人が同時に言った。
「めおとっ！」
またまた顔を見合わせ、二人同時にプッと噴き出してしまった。
「めおとなんて随分、古めかしい言い方ね」
「何だ、君！　めおとだとー。要するに結婚ではないか。何を言い出すのかと思えば、呆れて物が言えんよ。学生の分際で。駄目に決まっているだろうが」
「あら、今すぐって訳じゃないし、一概に否定できないわよ。話ぐらい聞いたって損にはならないわ」
「損得の問題ではないだろう。大事な娘を嫁にくれと言ってるんだ」
「くれなんて言ってないわよ。ねぇ、あんた、どうであれ、娘を気に入ってくれた男が出てきたんだから、それはそれで嬉しいんじゃない。下手したら、今後そんな男は現れないかも知れないじゃない。とにかく話を聞きましょうよ」
「聞く必要などない。まだまだ早い。結婚など」
「だから、今すぐなんて言ってないじゃない」
「じゃー、何日だって言うんだ！」
木村は、二人の遣り取りを聞いていたが、己の存在感が薄れていくように思った。
「あのー、宜しいでしょうか、話しても……」
ふと木村を見る二人。孝三が芳江を制して言った。
「君が急に狂ったとは思いたくない。何故にそのような事を考えたのか理由（わけ）を訊こう、理由を。事と次第に依っては下宿を出て行ってもらうか今後一切、佳奈との面会を謝絶する」
孝三は、鼻から駄目を決め込んでいる。
「隆ちゃん、私も理由を訊きたいわ。どうしたのよ？」
木村は急に立ち上がり、直立不動の姿勢で、

Copyright© H.Mitani

「男として責任を取らせていただきます！」
と言ったかと思うと深々と頭を下げた。この言葉を聞いた二人、エッ！と叫んだ。孝三が訊いた。
「木村君、佳奈と……」
木村、キッパリと答えた。
「はい」
ギョッとして顔を見合わせる二人。即、固まってしまった。そのままの姿勢の三人。しばしの時が流れた。芳江と孝三が小声で話しだした。
「貴方、男の責任って」
「おう、そういう事だ。芳江、まさか、既に……」
「まさか……。そこまでは……」
「だが、そんな機会はあったのか？」
「私の三味線の発表会。隆ちゃんに看病を頼んだの」
「何日だ？」
「昨日……」
「じゃー、出来たかどうか判らないじゃないか」
「でも、ほうずき市も二人きりで行ったわよ」
「なに言ってるんだよ。あれは、四日前じゃないか」
「門限を破った日。あの日だわ、きっと」
「うーん、微妙なタイミングだな。佳奈は、まだ二十歳だぞ。総てにおいて、まだ早い」
「なに言ってるのよ。私があんたと一緒になったのは二十歳よ」
「おう、そうだったな。芳江、木村君に訊いてみろよ」
「私は、そんな重大なこと訊く勇気ないわ。男のあんたが訊いてよ」
「こう言うデリケートな問題は、女の仕事だ」
「何言ってるのよ、速水家の今後の問題でしょ。一応、亭主なんだから貴方の役割よ」
「よし、この件は最後に訊こう」

Copyright© H.Mitani

孝三が身を正して言った。
「木村君、そのままの恰好じゃ疲れるだろう。それに話し辛い。座りなさい」
木村が座った。二人は木村を見たが、木村は完全に目が据わり、何か覚悟を決めた様子である。もし誰かが切腹しろと言えば、躊躇なく腹を切りかねないほどの雰囲気である。
「ウォホン！　ところで先ほども言ったが、君は、まだ学生だ。軽々しくめおとなどと言うものではない」
「はい。ですから、いずれ私が社会人になってからです」
「いずれって言ったって隆ちゃんは小説家志望でしょ。あんた、そんな職業じゃ、喰えないわよ」
「そうだ。その通りだ。喰わなければ、人間は死ぬ」
どうも孝三の発言には迫力がない。二人の話を聞いた木村、急に相好を崩した。
「ワッハッハー、喰うだけでしたら力仕事で充分です。問題は、二人の愛です」
愛……　どうにも、調子を狂わされる二人である。
「ねえ、もう約束しちゃったの？　佳奈は、何て言ってるのよ？」
「別に」
「別に、って……まさか、隆ちゃん一人で決めたことなの？」
「はい、そうですが」
急に肩の力が抜けた二人。
「でも、出来ちゃったんじゃないの？」
「はっ？　何が出来たんですか？」
「子供……」
「やだなー、なに言ってるんですか大人のくせに。キスだけで子供は出来ませんよ」
ガタガタガターッと崩れ落ちる二人。そんな二人を尻目に、木村が、

Copyright© H.Mitani

「では、私は勉強がありますので、宜しくお願いいたします」
と言って居間を出掛かったが、振り返り、
「お父さん、お母さん」
ギョッと顔を見合わせる芳江と孝三。二人揃って、
「お父さん、お母さん……」
何処吹く風の木村、
「国の両親には、さっき速達を出しましたので。これも四万六千日のご利益です。ありがたいことです」
と神妙な顔で出て行った。
しばし無言のままの二人。芳江が口を開いた。
「ノンビリしているようで、こういう事は素早いのね。人は見掛けに依らないって言うけど、本当ね。ねぇ、私は賛成だけど、貴方は」
「まぁ、縁と言うからな。それに、今後、佳奈に縁談話しがあるかどうかは判らんしな。ひょっとすれば、行かず後家の可能性もある」
「なに言ってるのよ、縁起でもない」
「いや、縁と言うものは万人には判らんものだ。私だって妙チキリンな縁で、こうなってしまった」
「あらー随分な言い方じゃない。妙チキリンで悪かったわね。それに、こうなっちゃったなんて。じゃー、貴方は幸せじゃないって言うの！」
「芳江、言葉の綾だよ。そんな事より木村君が速達って言ってたけど、一両日中には先方さんにも知れるぞ。おい、佳奈に確かめなくて良いのか」
「そうね、どうなるのかしら」
何とも落ち着かない二人であるが、急に立ち上がった。

芳江と孝三が佳奈の部屋に居る。
「佳奈、あんた、どう思ってるの？」
「良いんじゃない」

Copyright© H.Mitani

いとも軽い答え方に、二人は渋い顔をする。
「先方さんは九州ですよ。結構、古めかしい考えを持っているかも知れないし。入り婿なんて許しゃしないわよ」
「そうだ。いくら次男でも煩く言うに決まっている」
「大丈夫よ、信念を貫く人だから」
「誰が？」
「西郷さん」
訳が判らない二人であった。

（十七）

――二人は、まだ学生であります。それに、今すぐに結婚するわけではありません。何も急いで約束することもないだろうに、もっと良い相手が見つかるかも知れないのにとも考えますが、娘を持つ親としてみれば、とりあえず何となく落ち着くものであります。

＊

「良いのかね」
「良いのよ。変な虫が付くより気心が知れた男の方が安心よ」
「しかし、小説家志望なんて喰えないんじゃないか」
「大丈夫よ。良い体してるじゃない。隆ちゃんなら何でも遣れるわよ」
「下宿屋はイヤだなんて言い出したら、お前、どうするんだ」
「言わないわよ。どうせ売れない小説家なんて閑なんだから」
「先方さん、入り婿に反対すると思うけどな」
芳江もこの問題に関しては自信がない。
「速達を出したって言ってたわね。怒鳴り込んで来たらどうしよう」
「そうだな」

Copyright© H.Mitani

「信念を貫く人だって言ってたが……」
「西郷さんて、上野の西郷さんじゃない」
「そう言えば似ているな」
「そうね」
どうにも二人の会話は弾まない。

一方、佳奈の方は足も治り、大學に通い出していた。一応、両親に許された二人だが、佳奈も木村も今までと変わりない学生生活を送っている。大學には別々に行くし、キャンパスで顔を合わせても、ヤーと手を振るぐらい。野村も千津子も相変わらずの毎日。

ところが孝三だが……　芳江が夕食の準備をしていると、玄関の戸が勢い良く開く音がした。変だなと思い玄関に出てみると、興奮気味の孝三が立っている。

「貴方、静かに開けてくださいよ。もうガタが来てるんだから」
ふと見ると孝三は、何やら長い袋を持っている。
「何、それ？」
ニヤッと笑った孝三。玄関で袋の紐を解きだした。小鼻をピクつかせながら長い棒を取り出した。木刀ッ！　さすがの芳江も口をアングリ。
「私は目覚めた。木村君の弟子になる」
アルバイトでクタクタになった木村が玄関の前で、
「ただ今、帰りました」
と戸を開けると、玄関に木刀を構えた孝三がいる。
「ターッ！」
なんと、孝三が木村目掛けて木刀を振り下ろした。咄嗟の事とは言え有段者である。木村は、ヒョイと身を交わした。孝三は、ドドドドーッつと踏鞴（たたら）を踏んで玄関の外に飛び出し、頭からスッ転んでしまった。
「イテテーッ！」
物音を聞きつけた佳奈と芳江が出てきた。

Copyright© H.Mitani

「貴方ーッ！」
そこは夫婦、芳江が孝三の傍に駆け寄り抱きしめた。
「隆ちゃん！　あんた、何したの？」
木村も理由が判らない。頭を掻いていると、孝三が、
「いやー、流石だ。殺気を感じて身を交わす。私は剣の極意を垣間見た気がする」
とムクムクと起き上がったと思ったら、木村の前に土下座した。
「どうか、どうか、私めを弟子に」
総てを理解した佳奈、呆れ顔で自分の部屋に戻って行った。

――木刀は、結構、重いんですな。初めて手にした者がそう簡単に振り回せるものではありません。ましてや体育の時間でしか運動をしなかった孝三、剣道を遣りたいのであれば、まず竹刀から始めるのが常識であります。蛇足ながら、映画やテレビで刀をいとも容易く振り回してのチャンチャンバラバラ。あれは嘘ですな。真刀は重いものです。幾らドラマだとは言え、もう少し何とか……

＊

この夜は、擦り剥いた膝やおでこに薬を塗ってもらい大人しく床に入った孝三だが、興奮冷めやらず頭は冴えっぱなし。

（十八）

東理大學では、毎週水曜日を部活活動日として、総ての講義は三時に終わる。この日も佳奈と千津子、野村は図書館前の芝生に座り、駄弁っている。
「ねぇ、あの人……」

Copyright© H.Mitani

千津子が指差す方を見ると、何やら古風な格好をした小柄な老人が歩いている。羽織袴を小粋に着こなし、手には年季の入った革製の箱鞄。何よりも人目を引くのは、真っ白な口髭。まるで富士山のようにすっきりとした三角形を成している。颯爽と歩く姿に、すれ違う学生たちも思わず目を留める。この老人が三人の前を通り過ぎようとした。

「ねぇ、あの人、何かしら。佳奈さん、どう思う」

「書道の先生って感じね」

野村が思わず、

「格好良い！」

と叫んでしまった。ふと足を止めた老人が、おもむろに三人を見た。眼光鋭い眼差し。仰け反る三人。見れば、老人は足取りも軽やかに三人に近付いてきた。

「ちと、物をお尋ねしたい」

三人は目を見開いたまま何も言えない。

「道場は何処にあるか、教えていただけないか」

佳奈が勇気を奮って訊いた。

「あのー、何の道場ですか？」

「おう、そうじゃった。剣道でござる」

佳奈が立ち上がり、道場の方角を指で示した。

「あいがとさげもした（ありがとうございました）」

と老人が歩き出す。

「今、何ていったの、あの人」

キョトンとする三人。

此処は剣道部の道場。激しい掛け声が響き渡る中、部員たちが稽古をしている。木村も奥の方で竹刀を振っている。入り口に立って稽古を見ていた先程の老人、鞄を置き、ツカツカツカッと道場に入っていった。

驚いたのは部員たち、怪我でもされては堪らない。

「お爺さん、危ないですよ。あっちに行ってください」

Copyright© H.Mitani

ところがこの老人、その部員から竹刀を奪い取り、木村の方に歩いて行く。木村は後ろ向きでいるため老人には気付いていない。この老人、
「隙ありッ！」
と大声で叫ぶなり、上段に構えた竹刀を木村の後頭部に打ち据えた。さすがの木村も意表をつかれたのか、いとも容易く後頭部を打たれてしまった。道場内が静かになった。部員たちが見守る中、イテテと頭を押さえて振り返った木村、
「じ、ジッちゃま！」
と言ったきり、身動きが出来ないでいる。
「隆盛！　修行が足りんな。戦場であれば、おまんさー、けしんだ（死んだ）」

――この老人、木村の祖父でありまして、紫雲斎との雅号を持つ剣道の達人であります。御歳、七十七歳。まだまだ矍鑠としております。実は、木村からの速達を受け取った両親が、自分たちには仕事があると紫雲斎に全権を委任して東京に送り出したんですな。紫雲斎は若い頃、東理大學に剣道の試合で来たことがあります。もっとも当時は帝国大学でありましたが……。いや、そんな事はどうでも良い。懐かしさも手伝い速水家に行く前に立ち寄った訳であります。道場に来れば、血が騒ぎます。それでもって先程の所業であります。
木村にはアルバイトがありますからな、紫雲斎は一人で速水家に行く事になります。

＊

速水荘の前では、芳江が水撒きをしている。その芳江がふと顔を上げると、小洒落た着物姿の老人が紙を片手に持ち、何やら家を探している様子。
「そこのお爺さん、こっちにいらっしゃい。誰の家ですか。教えてあげ

Copyright© H.Mitani

ますよ」
と勢い良く柄杓(ひしゃく)を振ってしまった。水は紫雲斎の顔に……。何と立派な髭の片方だけに水が掛ってしまった。片方はピンと勢い良く伸びているが水が掛った方は下を向く。これを見た芳江、思わず吹き出してしまった。紫雲斎はと言うと水を拭きもせず憮然とした顔でたたずんでいる。芳江は懐から手拭いを出し、
「申し訳ありません」
と髭を拭いた。これがいけなかった。両方の髭が揃って下を向いてしまった。何とも可愛らしい、みょうちきりんな顔。芳江は、堪えきれずに大笑い。
「おはん、ないすっと！」
芳江は紫雲斎が何を言ったのか判らない。今度はキョトンとしてしまった。
「礼儀作法を知らぬようでござるな。いい歳をして」
いい歳と言われた芳江の顔が引き攣った。
「あらまー、女に向かっていい歳とは、お宅様も礼儀知らず」
二人は道の真ん中で睨(にら)み合ってしまった。
そんなところに佳奈が帰ってきた。紫雲斎に気付き駆け寄ってくる。
「さっきのお爺さんじゃない。何してんの？　あら、お髭が……」
芳江が柄杓を持っている。事の次第を、即、理解した佳奈、
「お母さん、また水、掛けちゃったんでしょう。速水荘の女将は気が荒いって評判になっちゃうわよ」
と大きめの声で言った。
この言葉を聞き、紫雲斎がギョッとする。
「今、速水荘と申されたが」
「えぇ。私んち」
と掠(かす)れかけた表札を指差す。
「では貴女が佳奈さんかな。そして、こちらの礼儀知らずが、芳江…

Copyright© H.Mitani

…」
今度は佳奈と芳江が、ギョッとする。
「何で名前を……」
此処は速水荘の居間。顔をそむけた芳江と元の富士山に戻った髭をたくわえた紫雲斎が座っている。そこに佳奈がお盆を持って入ってきた。
「さー、二人ともお茶でも飲んで。いい歳をして何やってるのよ。まるで幼稚園児みたい」
二人が同時に佳奈を見た。
「佳奈、歳の話しは止めてよ」
「如何にも、可愛い顔をして大人をからかうものではない。幼稚園とは失礼でござろう」
何とも紫雲斎の話しっぷりは時代掛っている。
「そうですよ。私は、そんな娘に育てた積りはありません」
佳奈が首を竦めると同時に、玄関から声が聴こえた。
「ごめんくださいまし」
佳奈が居間を出たが、すぐに戻ってきた。
「お母さん、真奈美さん」
ギクッとした芳江、
「今、取り込み中だからって、帰ってもらって」
佳奈が振向くと、そこに巨乳が、
「あら、お客様でしたの……」
と居間を覗いた。真奈美を見た紫雲斎の顔付きが変わった。
「おー、逞しき女子。これぞ正に観世音菩薩」
「まー、正直なお方ですこと。それに、お髭が素敵。可愛い……」
と体を揺すった。大きく揺れる乳房を見た紫雲斎、長旅の疲れも手伝ったのか、ウーンと唸って引っくり返ってしまった。真奈美の動きの素早い事、呆気に取られている佳奈と芳江を尻目に紫雲斎の傍に駆け寄り抱きしめた。

Copyright© H.Mitani

「お気を確かに！」
薄っすら目を開けた紫雲斎だったが、何しろ巨乳で鼻を塞がれている。今度は、目を白黒し始めた。気付いた芳江が、
「真奈美さん、そのデカパイをどけなさい！」
と叫んでしまった。
「まー、デカパイとは失礼な。美乳と言いなさい。美乳と！」
紫雲斎をそっちのけで、二人はにらみ合ってしまった。
「何やってるのよ！　早く寝かせなくちゃ駄目じゃない」

此処は、二階の下宿部屋。布団が敷かれ、額に濡れタオルを置いた紫雲斎が寝ている。横には佳奈と芳江、そして真奈美が座っている。
「木村さん、早く帰ってこないかな」
「アルバイトでしょ。困ったわね」
「まー、このお方、木村さんとは、どのような」
「お爺ちゃまです」
「まー、それにしては小さなお方」
真奈美は、紫雲斎を見詰めたままでいる。
「真奈美さん、木村さんの事は諦めてね」
「それは、どういうこと？」
「私、木村さんと婚約しました」
「エーッ！」
と、目ん玉を飛び出すほどの形相で真奈美が驚く。しばし固まっていた後、これまた、ウーンと唸り、ぶっ倒れてしまった。倒れた瞬間、肉付きの良い体がボヨンボヨンと波打った。
「もう、どうなってるのよ。今度は真奈美さんよ。お母さん、どうする」
「仕方ないわね、寝かせましょう」
二人は布団ごと紫雲斎を動かし、その横に布団を敷いた。さて、と二

Copyright© H.Mitani

人掛りで真奈美を動かそうとしたが、どうにも重くて動かせない。二人は俵をゴロゴロするように、真奈美を転がして何とか布団に入れた。

――矍鑠とした紫雲斎ですが、マザコンなんですな。ふくよかだった母親に憧れを抱き、真奈美のような女を見ると心が矢鱈とときめいてしまう。余程、長旅が応えたんですな、旅の疲れとときめきの二重奏。可哀相に気が遠くなってしまいました。

＊

「ねぇ、どうする。お医者さん、呼ぶ？」
「大丈夫よ。少し寝れば元気になるわよ」
「お爺さんの名前、まだ聞いてないわ」
「そうね。いいわよ木村さんで」
「私、困るわ。ゴッチャになる」
「あたしは問題ないわ。あっちは隆ちゃんだから」
「もう、後で木村さんに聞いてみようっと。じゃー、後お願いね」
エッと言う間もなく、佳奈が部屋を出て行ってしまった。
佳奈が居間に戻ると、孝三が腕を組み、憮然とした顔で座っていた。
「佳奈、お母さんは何処だ？　亭主が帰ってきたというのに」
「今、二階に居るわ」
すっくと立ち上がった孝三が居間を出て行く。孝三が、勢い良く部屋の戸を開けた。
「ギョ、ギョッ！」
其処には三人の人間が、川の字を書いて眠っていた。孝三が呆気に取られていると、そこに泥だらけになった木村が来た。
「お父さん、どうしたんですか？」
孝三が部屋の中を指差す。部屋に顔を入れた木村、
「じっちゃま！」

Copyright© H.Mitani

と叫んで紫雲斎を揺り動かした。物音に気付いた芳江と真奈美が、ウーンと言って体を起したが、木村は二人には全く目を向けようとしない。芳江は、そそくさと立ち上がって孝三の傍に行き、

「さ、下に行きましょう」

と、その場を去ってしまった。

真奈美は、無視されたままでいる自分が哀れになった。大きな声で、

「あー、苦しい」

と唸ってみたが、木村の注意を引くことは出来ない。仕方ないので起き上がり、木村の肩を叩いたが、何と木村はその手を邪魔だとでも言わんばかりに払ってしまった。

真奈美が寂しげに部屋を出ていった。

（十九）

今日もまた、キャンパスの芝生の上で楽しそうに昼食を食べる佳奈たちがいた。

「ねぇ、あの爺さん、どうしたのかしら」

どうやら千津子は紫雲斎を気に入ったようである。

「あんな髭生やしちゃってさ、まるで俗世を捨てて山奥に住み、日々、剣の奥義を究めようと瞑想に耽っている感じだよ。何となく木村さんのその後って感じだな」

「そうなのよ。その木村さんなのよ」

佳奈がボソッと呟いた。エッと佳奈を見る千津子と野村。

「ねぇ、どう言うこと?」

「あの人、木村さんのお爺ちゃん。今、私んちにいるの」

「エッ！　ねぇ、何でよ？　何しに来たのよ。ねぇ、教えてよ」

食い入るように佳奈を見詰める二人。

Copyright© H.Mitani

「ご両親から全権を委任されたんだって」
「佳奈さん、ちょっと待ってよ。和平交渉じゃないんだし、全権委任なんて大袈裟だよ」
「そう、大袈裟なの。何事も……」
ずり落ちたダテ眼鏡を上に上げた千津子が冷静に訊いた。
「私たち友だちだと思うの。何事についても語り合うべきだと思うの。ましてや、男と女の問題であれば、心を開いて真摯な態度で共に悩むべきだと思うの。隠し事っていけないと思うの」
佳奈は、別に隠す積りはない。ただ、話す機会がなかっただけある。
「実はね」
千津子と野村が身を乗り出して顔を佳奈に近付けた。佳奈は座ったまんまで、ズンズンとお尻を持ち上げて後退りした。
佳奈は、二人に事の次第を丁寧に語った。
千津子は目を輝かせて聞いていたが、野村は徐々に顔を下げていき、ファースト・キスの場面では、顔を手で覆ってしまった。
「そう言うことなの。あちらが断固反対の態度をとるか、条件付きで身柄の引渡しに応じるか、双手を上げて了承するか。全く判らないの」
「何日、結婚するんですか？」
野村が、か細い声で訊いた。
「そんなの、まだまだ先よ」
何となく野村の瞳に生気が甦ってきた。
「でも、私、こうなる運命だったって確信してるの。多分、幸せになると思う」
野村の瞳にあった僅かな光りが消えた。
「私、学部、変わろうかな」
千津子が突拍子もないことを言い出した。
「何処に？」
「医学部心理学科。五重塔理論、ひょっとしたら博士号が取れるかもし

Copyright© H.Mitani

れない。ねぇ、野村さん、そう思わない」
野村は完全に死んでいた。佳奈が野村の体を揺すった。野村は、そのままの姿で芝生に転がった。
千津子は、余りにも意気消沈の野村を気遣うようになっていた。
野村さんて可哀相。彼を立ち直らせることって出来るかしら。その術を会得すれば、五重塔理論は、より完成度を増すはずだ。
野村の自主休講が目立つようになっていた。
「千津子、どうする？　あんなに真面目だった博司なのに」
「フフ、佳奈さん、私に任せて」
「どうするの？」
「理論的には強烈なるオルタネィティブ。つまり、代替案の提示により膠着化した原因に対する迂回路を作れば良いのよ。それにより、真っ暗な心に光りが燈るように仕向ける」
「何だか面倒くさそうね」
「簡単よ。女における五重塔に対し、男における命の泉……」
「何、それ？」
千津子が西の空を見上げて、
「湧き出る命の水、尽きる事のない歓喜の波」
佳奈は、ちょっと心配になってきた。
「千津子、あんた大丈夫？」
ふと、佳奈の方に顔を戻した千津子が立ち上がり、
「私、野村さんの家に行ってみるわ」
と、また西の空を見た。

（二十）

速水荘の居間。芳江と孝三がヒソヒソ話をしている。

Copyright© H.Mitani

「ねぇ、明日よ。勝算はあるの？」
「なに言ってるんだよ。木村爺さんが賛成なのか反対なのか、皆目判っていないじゃないか」
「あんたは、速水家の亭主ですからね。ちゃんと議長役を勤めて下さいよね」
「えっ、俺が議長なのか。実質的に速水家を取り仕切っているのはお前だろう。都合の良い時だけ俺を前に出すなよ」
「あたしはね、あの爺さんに水を引っ掛けてるのよ。あたしが前面に出たら、向こうは感情的になるわ」
「俺……　会社だと、結構、格好良く、いろんな会議をまとめるんだけど、此処では駄目なんだよ」
「何で？」
「俺、此処では、入り婿だし……」
　芳江が孝三を見たが、その目には僅かばかりの涙があった。

　速水家の居間。速水家の三人、そして木村と紫雲斎が畏（かしこ）まって座っている。そして、正面には真奈美が座っている。
「芳江さんから、第三者として議長を遣ってくれって。でも、私お断りしたんです。私自身、これからどうしようかと悩んでいたんですもの。でも、これも何かの切掛けになるかと思い、でも、私、寂しいの」
と、でもでもと言いながら涙を流しだす。
　紫雲斎が、サッと懐に手を入れ、懐紙を出して真奈美に渡した。受け取った真奈美が懐紙を鼻に持っていき、ビエーッと鼻をかんだ。仰け反る面々……
「では、今回の案件に関し、言いたい事がある方は、どうぞ」
　紫雲斎が手を挙げた。
「お爺ちゃま、どうぞ」
　紫雲斎、真奈美を睨み、

Copyright© H.Mitani

「私の名前は木村瞳。名前を呼んでいただきたい」
「では、瞳ちゃん」
「ちゃんは余計でござる。木村とお呼び頂きたい」
「でも、それじゃー、我が愛しき木村さんと同じに……」
真奈美がよよと体を崩す。紫雲斎が立ち上がって真奈美の肩を叩き、
「儂が居るであろうが。お気を確かに」
キッと姿勢を正した真奈美。どうであれ店を切り盛りしてきた実績がある。
「では、今回の木村隆盛、及び速水佳奈の婚約に関し審議いたします」
何となく雰囲気が違うが、全員が神妙にしている。
「意見を許します」
紫雲斎が手を挙げた。
「学生の分際で……。我が孫とは言え、田舎育ちの純粋なる心を持ちし者を惑わしたる所業、許す訳にはいかず。断固反対！」
速水家一同が顔を見合わせる。果敢にも孝三が手を挙げる。
「所業と言いしが、如何なる所業なるや」
まるで芝居がかってきた。
「誑かしにござる」
「如何なるたぶらかしか。詳細に述べよ」
紫雲斎は頭を抱えた。そう言えば、何故、このような事態になったか聞いていない。
「裁判長、もとい真奈美殿、要は、我が木村家の家訓にござる」
「如何なる家訓なるや」
どうした訳か真奈美まで時代掛ってきた。紫雲斎が声高らかに、
「木村家の男子たる者、家を継ぐか、または分家として家を広げるべし」
真奈美は、木村が入り婿になるとの事情を知らない。
「あら、結婚して独立すれば、必然的に分家した事になるんじゃないで

Copyright© H.Mitani

すか。反対理由になっていません」
芳江が手を挙げた。
「速水家の条件は入り婿です。従って、木村家の分家にはなりません」
「まー、そうだったの。知らなかったわ。でも、どうであれ、結婚て二人の問題なんじゃないんですか」
真奈美が基本的な事を言い出した。列席した一同が黙ってしまった。
「幾ら思いを寄せたって、相手にその気がなければ駄目。私なんか」
真奈美が、またビエーッと鼻をかんだ。一同は顔をしかめたが、紫雲斎は心得ていた模様で静かに言った。
「真奈美さん、二十歳をちょっと越えたくらいの男と女が婚約もクソもないでしょう。まだ何も判っちゃいないんですよ。学芸会のようなものですよ。婚約ゴッコに他ならない」
今まで黙っていた木村がオズオズと手を挙げた。
「お爺ちゃんが二十歳、お婆ちゃんは十八で結婚したんでしょう。その意見は変ですよ」
「煩い！　お前は口を挟むな」
「今の発言は却下いたします。民主主義の世の中です。いくら祖父だからといって孫の発言を封じ込めることは出来ません。そのような独裁的なお方だとは、私、ガッカリいたしました」
紫雲斎、下を向いてしまった。どうも真奈美に嫌われたくないようである。しばし、場は静まったが紫雲斎がキッと手を挙げた。
「そもそも入り婿がイカン。入り婿などと、男として恥ずかしくないのか。恥を知れ、恥を！」
孝三の顔色が変わり、急に立ち上がった。
「恥！　恥と言ったな。俺は、入り婿だッ！　入り婿の何処が悪い。今まで真面目に真摯に己の人生を送ってきた。誰に憚（はばか）る事もなく、勉強をし、仕事をしてきた。そりゃー女房には頭が上がらないし、尻には敷かれている。良いじゃないですか。誰に迷惑を掛ける訳じゃない。それ

Copyright© H.Mitani

を恥とは」
皆は、孝三が紫雲斎に殴り掛かるのではと顔を強張らせた。紫雲斎も身構えた。だが、何と孝三はその場にヨヨと座り込んでしまった。どうにも見栄えの悪い結果である。佳奈が手を挙げた。
「私、速水でも木村でも、どっちでも良いの。それに、成り行きで婚約する事になったけど、結婚なんてまだ先じゃない。二人とも、これから先どうなるか判らないし」
真奈美が鼻をすすりながら訊いた。
「どういう事ですか。判らないって」
「だって、交通事故に遭っちゃうかも知れないし」
孝三が意気揚々と言った。
「それを言っちゃーお仕舞いよ。一応、これから先も生きている事を前提にしなくっちゃ」
一同が頷いた。
「判ったわ。私はね、木村さんとは、いずれ一緒になるのが運命だと思ってるの。理由は判らないけど。だから、みんなが反対したってそうなっちゃうと思うの」
――これが縁なんですな。理屈じゃないんです。そもそも、縁とは、ハ？　お前は、引っ込んでいろ。失礼いたしました。

＊

この言葉を聞いた真奈美の態度が変わった。静かな面持ちで語り出した。
「私、このような場に居ること自体、今、不思議なんです。芳江さんに頼まれて、そう言うこともあって良いのかな、なんて思ったんですが。でも、やはり変です」
真奈美が立ち上がった。

Copyright© H.Mitani

「失礼します」
との一言を残して部屋を出ようとした。木村が声を掛けた。
「真奈美さん、貴女の事情は兎も角、最後までお願いします」
佳奈がオズオズと言った。
「私、真奈美さんの立場になって考えたんですが、余り無理も……」
木村が毅然とした態度で、
「佳奈さん、お爺ちゃんの事も考えてください。全権を委任され、鹿児島から来たんですよ。もし、両家の意見など関係ないとの結論が出た場合、お爺ちゃんが来た意味がなくなります。それじゃー、まるで子供の使いです」
「じゃー、どうすれば良いのよ」
「何か、お土産がいります」
真奈美が声を上げた。
「判ります。その意見。老い先短いお方です。生きている意味を考えてあげなければなりません」
紫雲斎が目を剥いたが、言葉はない。
「うーん、そうだな。真奈美さんは良い事を言う。そうだよ、老い先短いんだから」
孝三が追い討ちを掛けた。残りの者たちは紫雲斎を気遣って顔を見たが、紫雲斎はめげていなかった。
「老い先云々はともかく、土産は欲しい。このまま帰るようであれば、我が人生、そのものを考え直さなければならない」
佳奈が言った。
「ねぇ、土産って、どういう事？」
当然ながら木村は木村家の内情を知っている。
「何でも良いんだよ。帰って親たちに胸を張って言えることだよ」
芳江が軽く言った。
「ねぇ、何か条件を言ってもらって、それを考えれば良いんじゃない」

Copyright© H.Mitani

孝三が受けた。
「速水家としては入り婿を条件として提示している。この条件に木村家があくまでも反対するのであれば、この交渉は決裂する。交換条件ではないが、何か木村家の条件を提示して欲しい。如何か」
紫雲斎は考えた。隆盛は言い出したら後に引かないところがある。決裂すれば子供の使いで終わってしまう。息子夫婦に対する我が位置付けは、明らかに落ちる。困った。

（二十一）

一方、こちらは千津子。野村に、しつこいほど携帯を掛けたが受信できませんのメッセージばかり。これでは埒が明かない。高校時代の先輩ではあるが家に行った事などない。だが、このままでは野村が引き篭もりになってしまうかも知れない。千津子は住所を頼りに訪問する事にした。
今、千津子はTシャツにGパン姿で石神井公園ボート池の畔を歩いている。陽射しは強いが湖面を渡る風邪は爽やかである。ボートを漕ぐ二人連れ。白鳥を模した足漕ぎボート。千津子は、以前、白鳥ボートに乗った事がある。このボートは見掛け以上に悲惨なのである。必死になって足を動かしても思ったほど進まないのだ。しかし、形相を変えて漕いではいけない。何故なら、見っともないからだ。何しろ白鳥ボートなのである。あくまで優雅でなければならない。千津子は、気取った顔で足を動かす二人連れを見てニヤニヤした。相手も気が付いたようだ。ニコッとしたが、その笑いは明らかに引き攣った笑いであった。
子供連れや隠居っぽい爺さんたちが釣りをしている。バケツを覗いたが小さなザリガニ程度の釣果。釣りの雰囲気を楽しめれば、それで良いのだろう。ま、考えてみれば微笑ましいものである。

Copyright© H.Mitani

池の周りは、煉瓦のようなものを敷き詰めた道になっている。その上をエッサエッサと腕を振って歩く中年夫婦。それに、貧弱な体にランニングシャツとパンツをまとった中年男が汗だくになって走っている。今にもぶっ倒れるのではと、見ている方が惨めになってしまうほどの形相である。家族のためにも笑顔で走って欲しいものだ、などと考えながら千津子は野村の家を捜した。湖畔には豪華な家が並んでいる。都会の喧騒を離れ、池や公園の緑を愛でながらの毎日なのであろう。湖畔から高台へと続く広い庭が目に入ってきた。何百坪あるのだろう。庭を伝って目を上げていくと、上の方に豪華な日本家屋がある。二階建ての横に長く伸びた屋敷。四、五十メートルはありそうだ。金とは、ある所にはあるものである。

千津子は、感心しながら湖畔に面した大きな門を見た。表札には野村とある。この屋敷だわ。野村先輩、こんな凄いお屋敷に住んでるんだ。

多少、気後れしたがインターフォンを押した。何秒か過ぎた。

「はい、どちら様でございましょうか」

あくまでもお淑やかな口調の女の声。

「あ、あのー、松本千津子と申します。野村先輩、いらっしゃいますか？」

「野村先輩？　あっ、お坊ちゃまの後輩のお方でございましょうか。で、どちらの後輩のお方でございましょうか」

お坊ちゃま……

「あ、あのー高校の……今は、東理大學の後輩です」

「あらご学友様でしたの。えーと、千津子様でいらっしゃいましたね。少々、お待ちくださいませ。お坊ちゃまにお訊きして参りますので」

「は、はい。宜しくお願い致します」

ご学友様……千津子は、己の姿を首を下げて見回した。Tシャツに G パン。ご学友として相応しい格好とは思えない。ままよ、今更、悔やんでも、と勇気を奮いだしたところに声がした。

Copyright© H.Mitani

「千津子よー、俺、気分悪いんだ。悪いけどさー、今日は会いたくねぇんだよ」
どうしたのであろうか、野村の口調が違う。
「なに言ってるのよ！　サボってばかりじゃない。心配して来てあげたのよ。顔ぐらい出しなさいよ」
千津子はTシャツ、Gパン姿を恥らうのを止めた。
「もう、どうでも良いんだ。真っ暗なんだ。何もしたくないんだよ」
「馬鹿！　早く顔出しなさいよ。さもないと家に、火、つけるわよ！」
野村は、まさかと思ったが千津子の事である、何をされるか判らないとの恐怖心が沸いてきた。
「わ、判ったよ。今、行くよ」
立派な門の前で、若い女が顔をしかめて貧乏揺すりをしている。ゆったりとした面持ちで湖畔をそぞろ歩きする者たち……　眉をひそめて千津子を見る。千津子が睨み返す。連中は、サッと目を逸らす。この動作を何遍か繰り返すうちに、大きな扉が厳かに開いた。
そこにはゲッソリと痩せ細り、無精髭だらけの野村が、ヌーボーと立っていた。千津子の胸に、フツフツとある感情が湧き出してきた。

（二十二）

紫雲斎が、これほど悩んだ事はない。己の立場を保ち、息子夫婦を納得させるためには……。紫雲斎は、己の結婚を思い出した。親同士が決めた相手との結婚。結婚式当日に妻になる女を見た。ま、こんなもんだろう。納得した。死んだ婆さんとこの頃の話をしたことがあったが、婆さんも同じように思ったらしい。ま、こんなもんでしょうね。子供が出来、息子が農場を継ぐと言った。嬉しかった。息子は結婚し、二人の孫が出来た。上の孫は農場を継ぐと言った。下の孫、隆盛だが、俺を見習

Copyright© H.Mitani

って剣道に夢中になった。嬉しかった。ん、隆盛……この名前は、私の親父がつけた。そうか、木村家は代々、最長老が生まれた子供の名前を付ける。

「これだッ！」

紫雲斎が大声を上げた。一同が目を見張り、紫雲斎を見た。目は爛々と輝き、まるで虎のような形相。

「野村先輩、さっきインターフォンに出た人、誰？」

「婆や」

「あ、そう。随分丁寧な話し方をするのね」

「そう。元、華族。戦争後に没落しちゃってね。お袋の行儀見習いの先生として家に来たんだって」

「へー、口煩いんじゃいの」

「全然。もう良いんだって」

「何が？」

「時の流れは止められないって、何だか達観しちゃってるから何も言わない。でもね、立ち居振る舞いを見ていると、自然と真似ちゃうもんだよ、人間て」

「それで先輩も上品なんだ。ねぇ、散歩しようよ。天気、良いしさ」

「駄目。風呂入ってないし、髭、剃ってないから」

「じゃー、入れば良いじゃない。髭だって剃れば良いのよ」

「何も遣る気が起きない。風呂も」

千津子が冗談ぽく言った。

「お風呂、一緒に入ってあげるから」

トロンとしていた野村の目が、急に活き活きとした。千津子を見詰め、急に手を掴んで庭の奥へと連れて行こうとした。

「ま、待ってよ。冗談よ、冗談！」

野村は聞く耳を持っていない。まるで獲物を捕らえた野獣の如き有

Copyright© H.Mitani

様。今まで見たこともない野村の強引さ。千津子もまんざらではない。

――あるんですな、こう言うことが。たとえ冗談交じりとは言え、自分が言った事を真に受けて、その気になっちゃう男が。普段見せた事がない雄々しさ。しかも、先程、千津子の胸に湧き出た感情とは母性愛のようなものでしてな。この人を立ち直らせる。そうよ、私しかいない。

＊

「ねぇ、本気にしちゃったの？」

野村が立ち止まり、千津子を見た。目は血走っている。

「当たり前だ。もう、俺を止めることは出来ない。千津子は、俺の中に燻（くすぶ）っていた男を目覚めさせてくれた。感謝する」

多少、薄汚れた感じではあるが、真顔でキリッと断言した野村。千津子も、その気になってしまった。

「風呂は、いつでも沸いている。裸になればすぐに入れる。しかし、その前に……」

何となく肩を下げた野村。

「一緒に入って良いか、婆やに聞いてみる」

ガクッと膝を折る千津子。

「あら、お坊ちゃま、このお方、お綺麗ですわ。フフ、お坊ちゃまったら、隅に置けない！」

なんと婆やの雛子が野村の太股を抓った。

千津子は、居間の豪華さに目を見張っていた。広さは三十畳ほどあるのではなかろうか。シックなヨーロッパ調の部屋。変な成金趣味丸出しの虎の毛皮とか、布袋様、大黒様などは置いてない。大理石の床には、トルコ製であろうか緻密な織りの絨毯。サンタクロースが手を広げて降りてきても、全く問題ないような大きな暖炉。

Copyright© H.Mitani

「千津子様、ご両親は今、海外旅行ですの。私、お二人から暮々もお坊ちゃまの事をと申されておりますの。ところで、お坊ちゃま、ご両親には千津子様の事、すでにお話になっていらっしゃるのですか」
「別に……特に何も言ってないよ」
「まぁ、お嫁様になるお方に私が初めてお目に掛る。嬉しい……」
雛子が目に涙を浮かべ出した。野村と千津子は目を合わせて同時に言った。
「お嫁さん！」
そのまま見詰め合ってしまった。

――詳しい事情を知らない第三者が、ふと漏らした一言……。これが、結構、厄介なものでしてな。蟻の一穴が千里の堤防を破ると言いましてな、小さな事を放っておくと大変な事になる訳でして。ちょっと喩えが拙かったようですが。ま、ようするに乾いた藁にマッチで火を点けたようなもの。下手をするとメラメラメラッと燃え上がってしまう。果てさて、どうなることやら。

＊

「宜しございます。婆やが総ての責任を取りましょう。たとえご両親が反対なさっても、私が体を張ってお二人をお守りいたします。既成の事実、これが意外と人生におきまして幅を利かせるものでございます。ささっ、お二人とも急いで閨（ねや）に……」
呆気に取られている二人。ふと野村を見た雛子がキツイ顔で言った。
「お坊ちゃま、いけません。その格好ではいけません。お風呂にお入りになり、お髭をお剃りにならなければ。初夜は身奇麗に。これが肝要にございます」
二人が同時に叫んだ。
「初夜ッ！」

Copyright© H.Mitani

野村が気を取り直して訊いた。
「婆や、初夜って言ったけど、まだ、昼間だよ。それに、千津子の意見も……」
「何を仰るのですか。男の家にうら若き女が訪ねてきた。これが何を意味するか、お坊ちゃまはご存じない」
雛子が裁判官のような顔付きになり、
「千津子様、貴女はお坊ちゃまをお嫌いですか」
「い、いえ」
「では、お好きですか」
「は、はい」
「ご覧なさい。良いですか、お手々つないでランランランは、もうご卒業なさっています。最高学府にて研鑽に励む立派な男と女。ささっ、お風呂に」
千津子は研鑽に励むと言われた時、自戒の念からか、多少俯いた。
「千津子様もご一緒にね。坊ちゃんのお背(せな)を、宜しくね」

「ねぇ、強引にお風呂に入れられちゃったけど、これからどうなるの？」
「うーん、神のみぞ知る、かな」
二人の声が総檜造りの風呂場に響いている。内湯とは言え、タオルを湯船に持ち込んだりはしない。千津子は手と腕で胸と腰を隠している。一方、野村も手でアソコを隠している。
――いくら親しいとは言っても、今までは友だちですからな。急に、互いが男と女である事を意識した訳で、初めて裸になって相対すればやはり恥ずかしい。互いに見たくて仕方がないのですが、ジロジロ見ればイヤラシイと思われかねない。かと言って、ソッポを向いているのも大人気ない。どうしたものかと暫し無言で大人しくしていましたが、人間

Copyright© H.Mitani

の特技に、慣れと言うものがありましてな。徐々に肩の力が抜けてまいります。

＊

「檜って良い匂いね。落ち着くわ。あー、気持ち良い」
と千津子が腕を広げた。チラッと胸を見た野村、目を剥いて凝視した。

――乳房って奴は、湯の中では浮力の関係で形良く、大きく見えるんですな。お湯は揺れておりますので、乳房も怪しげに揺れて見えます。元気溌剌とした男子にとり、これは衝撃的な場面であります。

＊

「さ、体、洗おうっと！」
千津子が野村に背中を向けて、ザバッと立ち上がった。お湯の滴る背中、プックリと盛り上がった桃のようなお尻。湯舟から洗い場に歩けば程好く揺れる。野村は、身動きできないでいる。千津子が、横向きで片膝を付き、体を洗い出した。

――女性が体を洗っている姿……これがまた、良いんですな。揺れる所はキチンと揺れ、しかもタオルが体を撫ぜていく。もう堪りません。エッ、お前って意外と好きもんだな、ですか。それはそうでしょう。私も一応、男ですから。

＊

「ねぇ、見てばかりいないで、先輩も体洗ったら」
ギクッとする野村。

――いざとなると、女の方が度胸を据えてしまうものであります。裸

Copyright© H.Mitani

でいる事にも慣れてしまえば恐いものなし。それに皆さんも、ご存知のように、このような場合、つまり、時めきの状態でありますが、女の体にはこれと言った顕著な変化は見られません。ところが、男はそうではありません。実に顕著な変化が起こるものであります。しかも素っ裸。変化を隠し覆せるものではありません。

＊

「逆上（のぼ）せちゃっても、私、知らないから」

千津子は野村が出られない理由を知っている。フフッと意地悪く笑ったと思ったら、野村の方に体を向け、両手、両足を開きバンザイの姿勢で立ち上がった。これを見た野村、両目が飛び出さんばかりの形相で、

「ウワーッ！」

と叫んで水音高くバッシャーン！　と仰け反ってしまった。ブクブクブク……。頭はお湯の中に、帆柱を立てた体が浮き上がる。

今度は、千津子が、

「アレーッ！」

と声をあげ、両手で顔を覆った。が、そこはシッカリ者の千津子、指の間から見る物はキチンと見ている。

「思いのほか、凄い！」

（二十三）

紫雲斎の突然の変化に周りの者が顔を向けた。真奈美が、もうどうでも良いとの表情で、

「ご意見があれば、どうぞ」

紫雲斎が髭を撫ぜながら言った。

「では、こちらの最終条件を提示させていただきましょう。もし、この

Copyright© H.Mitani

条件を拒否されるようであれば、交渉は決裂。依って、木村家における身共（みども）の存在価値も消滅。面目も立たず、赤っ恥を掻く羽目に相成る。恥を抱いたまま余生を送る気は毛頭ない。潔く、この場にて切腹する所存でござる」

まさに時代掛った言い様。紫雲斎は、皆が驚くであろうと思っていたが反応がない。面倒くさそうな顔で芳江が言った。

「切腹と言ったって、この家には包丁しかないわよ。包丁じゃ、痛いんじゃない」

真奈美の頭の中も混乱し出している。

「それに絨毯が血だらけになりますよ。芳江さん、絨毯の洗濯って、お高いですよね」

佳奈は、先程より阿呆らしくなっていた。木村に耳打ちした。

「ねぇ、うちの両親も、多少ズレてるけど、お宅の方も結構酷いわね」

「そうであっても家族は家族です。佳奈さん、人生には我慢が肝要です。習慣も考え方も違う家と家が親戚になるんです。面倒でもあり、上手く行かないかもしれない。でもね、何かと役に立つものです。ここは我慢です」

「役に立つって、どんな事？」

「子供が出来れば、祝い物が届いたりするでしょう」

佳奈が大きな声で、

「やだ～、子供だって！　そんなー、恥ずかしい」

と木村の肩を思いっ切り叩いた。当然、周りの者は佳奈と木村を見た。

急に、真奈美が泣き出した。すでに紫雲斎が渡した懐紙はなくなっている。多少厚めの化粧が涙に溶け、どちらかと言えば、凄い形相になっている。そこは女同士、芳江がティッシュペーパーを渡して訊いた。

「真奈美さん、どうしたの？」

「だって、私はまだ子供産んだ事ないのに、この二人、もう子供が出来たなんて言うんですもの」

Copyright© H.Mitani

佳奈と木村は、目を剥いて仰天。芳江が、
「大丈夫よ、この二人、まだキスしかしてないんだから。子供は、当分、先の事よ」
「ウォッホン！」
紫雲斎が大仰に咳払いをした。

こちらは野村の寝室。十二畳ほどの広さ。千津子と野村が、ベッドに夏掛け布団を掛けて仰向けに寝ている。
「大きなベッドね。レスリング、出来るんじゃない」
「親父の考えなんだ。大は小を兼ねる」
「華族の出だって言うけど、雛子さんて意外と強引ね。ねぇ、ベッドに送り込まれちゃったけど、どうする？」
「俺、アレ持ってないしな……。万一って事があるし」
「そうね。ねぇ、私としたい？」
「当たり前だよ」
野村が、夏掛け布団の中央を指差した。そこには三角形のテントが出来ていた。
「フフ、嬉しい。でも気を付けた方がいいわね。雛子さんには、無事、終了しましたって言えば」
と言い終わらないうちに、ドアがコンコンと叩かれた。
「は～い、どなた？」
野村も可笑しい。雛子に決まっているではないか。
「婆やですよ」
と言いながら、雛子が汗だくになって入ってきた。
「いえね、近所の薬局に行って、買ってきましたのよ。はい、これ」
見ればナニである。千津子と野村が顔を見合わせた。
「まだ、学生さんですからね。万が一って事がありますからね、キチンとしないと」

Copyright© H.Mitani

「わ、判ったから、出てってくれよ」
「はい、はい。千津子様、体の力を抜いて、ゆったりとね。フフ、私、若い頃を思い出しちゃったわ。羨ましい」
とドアに向かって歩き出したが、振り返って、
「良いですね。大切なのは、既成の事実ですよ。婆やは証人です。こんな事はしたくないのですが、お二人のためです。ドアの外で、キチンと聴いていますからね。では、ごゆっくり」

――えー、私は、姿形のない透明人間のようなもの。今も寝室にいるのですが、これから先、二人がどのような行動に出るのか、興味はありますが品位を重んじる私です。ひとまず部屋を出ることにいたしましょう。しかしまー、どうなるのでありましょうね、この二人……

＊

皆が、紫雲斎を見た。
「では、最終条件を申し渡す」
一応、皆が緊張の面持ちになる。
「この条件に賛同いただければ、隆盛の両親より全権を委任されたこの紫雲斎。二人の婚約を認める所存でござる。そもそも、男と女とは……」
佳奈が横槍を入れた。
「お願いだから、早く言ってよ。もう、疲れちゃったわ」
紫雲斎、今度は軽く咳払いをした。
「隆典、佳奈、両名の間に子供が出来た暁には、拙者が名付け親になる。つまり木村家が子供の命名権を持つ！　如何かッ！」
心なしか紫雲斎の顔が紅潮した。
しかし、紫雲斎が心を込めて言い放ったのにも関わらず、一同に何らの変化も見られない。紫雲斎、改めて言った。

Copyright© H.Mitani

「如何かッ！」
真奈美が欠伸をしそうな顔で言った。
「あのー、私、もう宜しいでしょうか。お店の準備に掛りますので」
返事をする者はいない。真奈美は、ヨッコラショと大きな胸とお尻を揺らして、立ち上がった。焦り気味の紫雲斎と眠そうな顔の孝三が、チラッと真奈美の胸を見た。真奈美は、もう、この家に来る事はないだろうとでも言いたげな顔付きで部屋を出て行った。
白けた雰囲気の居間。目を輝かせているのは、紫雲斎ただ一人。どうにも反応がない。仏の顔も三度まで。三度目の正直。二度ある事は三度ある、などの言葉が紫雲斎の頭に浮かんでは消えたが、もう一度、言った。
「如何かッ！」
紫雲斎、今度は大音声で叫んだ。
眠そうな孝三とコックリを繰り返していた芳江が、一緒に言った。
「結構です。好きにすれば」
紫雲斎が立ち上がった。
「おぬしらッ！　礼儀というものがござろうが。切腹を覚悟してまでも考え抜いた条件に対し、何とした言い草。オチョクルのも好い加減にしてほしい！」
見れば紫雲斎の目に涙が溢れている。
――立場が違えば、思いも違います。とは言え、人が真剣に考えた内容がどのようなものであれ、一応、その人の身になって聞く姿勢は大切ですな。これを思いやり、優しさと言いますが、近頃、お目に掛りません。
＊
その場の空気が、キーンと張りつめた。孝三と芳江が紫雲斎に頭を下

Copyright© H.Mitani

げて言った。
「ごめんなさい」
佳奈が木村に言った。
「私は、嬉しいけど、貴方は？」
木村、佳奈から貴方などと呼ばれたのは初めて。急にドギマギしてしまった。
「ぼ、僕も、う、嬉しい。お爺ちゃんに賛成」
急に、この場の雰囲気が和やかになってしまった。こうなると涙を溜めた紫雲斎が困ってしまう。
「で、では、ご了承いただけたと解釈して、宜しいのですな」
皆が異口同音に、
「勿論でございます」

（二十四）

――男と女がいる限り、互いに興味を抱き、縁があれば結ばれる。そんな事が何十、何百、いえいえ、何十億回と繰り返されてきた訳であります。一つ一つの結び付きには、それぞれ、今回のようなドラマが存在いたします。でありながら、互いの我が儘で別れたりもする。ま、これも人生ですな。仕方がない。
閻魔様へのレポートでありますが、どうにも時間が掛かりそうであります。提出は何十年か先になりそうでな。それと言いますのも、佳奈と木村、千津子と野村、まだ二十代前半であります。私は、幸せな家庭を築くと確信しておりますが、どうなのでありましょう、それまでの間、紆余曲折があるようにも思えます。とは言え、二組のカップルが誕生いたしました。目出度し、目出度し……
エッ、観察が不充分ですか。うーん、では、もう少し、観察してみま

Copyright© H.Mitani

しょうか。

芳江と孝三、相変わらずですな。変わりようがありません。もっとも、孝三は、芳江が年寄りの冷や水だからと、再三再四、口を酸っぱくして言うにも関わらず、よろよろと木刀を振っております。木村は、疾うの昔に孝三の筋の悪さに気付いておりますが、運動にはなるだろうとそのままにしています。

紫雲斎についてお聞きになりたい？　そうでしょうな、切腹すると息巻いたのですから。一応、交渉は成立したわけですので役目は終わったのでありますが、久しぶりの東京。芳江、孝三夫婦と、さらには真奈美と共に東京見物。土産だと雷おこしをしこたま買い込み、意気揚々と、そうですな、まるで凱旋将軍の様相にて鹿児島へ。声高らかに笑い、子供の命名権を勝ち取ったと報告。これを聞いた木村の両親と兄、ま、こんなものだろうと、そそくさと部屋を出たんですな。紫雲斎は、とりあえず面目を保てたわけですので笑顔を絶やさない毎日であります。ところが、夜な夜な魘（うな）されるようになりましてな。何に？　ですか。真奈美の巨乳であります。どうやら老いらくの恋。ま、これも人生。さて、若者たちは、何をしてるんでしょうか……

＊

珍しくも真奈美の店に佳奈と木村、千津子と緊張気味の野村がいる。

真奈美は、婚約を祝うのが道理なのではと考え、佳奈たちを店に招待した。貸し切りにとも思ったが、それほど客は来ないだろうと、テーブル席を一つだけ予約席にしておいた。が、案に相違して満員状態。勿論、客は男性ばかり。

「ママさ～ん、水割り！」

「こっちにビール、お願い！」

「お酒、零しちゃった。おしぼりー！」

真奈美、煩くて仕方がない。ついに、

Copyright© H.Mitani

「あんた達、煩いわね！　勝手に遣んなさいよ。あたしだって忙しい時があるんだから！」
客にむかって何と言うことを。しかし、真奈美も真奈美なら客も客。皆、判ったよ、と呟きながら水割りを作ったり、ビールを運んだりしている。
「いえね、私は恋に歳の差は関係ないと思ってますよ。でもね、事此処に至っては、私も仕方ないなって……。でもね、今は、瞳ちゃんが気になったりして。ねぇ、木村さん、お爺さん、また東京に来ないかしら」
「済みません。聞いていません」
「そうなの。そうか、私が鹿児島に行っても良いのよね。恋に歳の差なんて関係ないんだし……」

――私、ヒョイと鹿児島に飛んでみましたが、紫雲斎がクシャミをしておりました。

＊

佳奈が訊いた。
「あのー、今日は何かあるんですか？」
ふと我に帰った真奈美、
「そうだったわ。ご免なさいね。実はね、木村さんと佳奈さんの婚約をお祝いしようと思いましてね」
と銘柄は判らないが、高級そうに見えるシャンパンの栓を開けた。
ポーン！
店の中に小気味良い音が響き渡った。一瞬の静寂。真奈美がシャンパンをグラスに注ぐと、トクトクと妙なる音色。
千津子が野村の脇腹を肘で突いた。野村は判ったよとの顔付きで、咳払いを一つ。ついに意を決したのか口を開いた。
「あのー、乾杯する前に、ちょっと話があるんだけど」

Copyright© H.Mitani

千津子がモジモジしている。
「実は……、あの……僕たち……。その……、え～と、早い話が……」
シーンとした店内である、イヤでも野村の話が聞こえてしまう。
「お兄ーちゃん、早い話って言ってるが、ちっとも早くねぇぞ。こっちだって忙しいんだ。さっさと言ってくれよ」
客たちの目が野村に集中してしまった。野村は真っ赤になりシドロモドロ。やはり千津子である。急に、立ち上がった。
「あたしと野村先輩は、婚約しました」
佳奈と木村、真奈美が唖然とした顔になり固まってしまった。客たちは事情を知らない。口笛を吹くやら拍手をするやら、ヤンヤヤンヤの掛け声。真奈美がこめかみに青筋を立て、客たちに大声を上げた。
「煩いわねーッ！　好い加減にしてよね。こっちはこっちなんだから。あんたたちは、そっちで遣ってれば良いのよ。冗談じゃないわよ。あたしの身にもなってよ。同時に二組の婚約祝いよ。可哀相な私！　あ～ッ！」
何と真奈美が、ぶっ倒れてしまった。その様子を正確に表現をすれば、倒れたその体は、暫しの間、ボヨンボヨンと波打った。
客たちも真奈美の周りに集った。どうする。医者はいねぇのか。救急車か。ザワザワ、ザワザワ……
木村が真奈美の横に膝を付き、背中に手を当てて体を起し、その手に力を入れた。ウ～ンと真奈美が、でっかい目を開けた。
「あら、あたし……」
とケロッとした顔で起き上がった。
「あんたたち、何、ジロジロ見てんのよ。席に戻りなさいよ」
客たちがスゴスゴと席に戻った。
「アーァ、哀しい。でも乾杯はしましょうね」
心なしか淑やかさを湛えた真奈美がグラスを高く上げ、静かな声で言った。

Copyright© H.Mitani

「カンパ～イッ！」
　真奈美の悲しみが強すぎるのか、五人の雰囲気は御通夜状態。佳奈が静かに言った。
「ねぇ、どう言うことなの、婚約って？」
　千津子と野村が同時に言った。
「灯台、下暗し」
「何、それ？」
　千津子が、あの日の出来事を微に入り細に入り、心を込めて語り出した。静寂の中、千津子の話が店内に流れていく。客たちも、その話に誘われるが如く、佳奈たちのテーブルに集ってきた。
「そう言う事なの」
　千津子は話し終えた積りでいたが真奈美が真面目腐った顔で訊いた。
「で、貴方たち、どうだったの？」
　野村が、キョトンとした顔で、
「どうって、何が？」
　客の一人が、
「あんたたち、ここまで人を引き込んでおいて、肝心な事を言ってないじゃないですか。そう言うのを裏切り行為って言うんですぜ。そう言う事では、人生、失敗しますぜ」
　佳奈が、この男を無視して言った。
「私と木村さんなんだけど、ごく自然に、何となく、これも流れなのかな、なんて思いながら……でも……こう言うのって、素敵だな、なんて思っちゃったりしたんだけど……」
　千津子と野村は、モジモジしているだけだった。

（了）

Copyright© H.Mitani

エッ！　これで終わっちゃうのかって。当たり前でしょう。私は、疫病神を退役したんですよ。男と女の秘め事を覗こうなんて気持ちは、毛頭ありません。

縁……　ひょっとすると閻魔様もお釈迦様も、アレッ！　と思うような事が、男と女の間に起こるのかも知れませんな。

さ～て、私も長年の独り暮らしにも飽きてきたし……。何処かに素晴らしい縁でも転がっていないかな……

（完了）

Copyright© H.Mitani

譚綴

「退役疫病神が観察したある恋の物語」

二〇〇六年二月十一日

編集・発行者　エムツー・プラデオ

三谷　弘

禁無断転載・複写

Copyright© H.Mitani